

特 226

193



始



特 226
193



奥の細道

文學博士 藤村作編



はしがき

一、本叢書は高等諸學校の國語科講讀用に當て、兼ねて中等教育を卒へたる人々の自修用に供するを方針として編纂したものであります。

一、本叢書は代表的國文學の優秀本弘布を目的の一部としてをります。随つて古典は流布本以上の優秀なる本を選び、又は流布本に下らざる價値を有するものを探ることに力めてあります。流布本は既往に於て流布の廣かつたといふ點で、特殊價値の存することは認められますが、同等以上又は同等の價値ある他本の發見されてあるものは、これが弘布を圖ることは學者當然の義務であると信じます。古典文學の忠實な研究鑑賞、批評をなすには、少しでも優れた本に依るべきでありますから、本叢書はこの點に於ても

貢献せんと期するものであります。

一、本叢書の校訂は選定した原本の形を壊さない方針でいたします。兼ねて各種の本も参考することにしたしますが、彼是から取捨して擅に原本を改めることはこれを避け、異同はこれを頭註に記すことにいたします。その頭註も餘りに學究的に流れて、些細の異同も悉く網羅して洩らさないといふよりは、寧ろ學者の良心と見識とに本づいて、慎重に取捨して、その必要なる限りを掲げることいたします。

二、現存する本文中最も優秀なりと認められてゐるものでも、同一目的で近く刊行されてゐるものは徳義上これを避けて他の善本を擇み、本文以外の點で本叢書の目的に添はしめることを期した積りであります。

三、註釋は頭註に止めますから、精細といふよりは的確といふことを期した略註としました。教科用書としてはこれを最も適當と信ずるからであります。言葉を以て十分に説明し難いものには、繪畫の力を借りるを便としますから、挿繪は努めて多く挿入することにいたしました。

一、本叢書は教授要目の精神に鑑みて、凡て全本を採用して、抄本を作りません。將來専門研究家たるとたらざるとに拘らず、中堅國民には全形のまま、代表的國文學に接し親しませる機會を與ふるを必要と信ずるからであります。しかのみならず、抄本では教授の經驗上どうしても物足らないもののあることを感じてゐるからであります。この點は教授實際家の必ず共鳴されることと信じます。

二、本叢書は教授の實際の經驗に鑑みて全本主義を採りましたが、さればといつて、決して各卷を首から順次に全部講讀させよといふ

のではありません。實際の教授では、それらの書の性質から自然にその中心たるべき部分を選出し、又必要の程度等に應じて適宜に部分を取捨するを有効と信じてをります。それで本叢書は全本であると同時に抄本たる性質をも兼有させる爲に本文中に活字を別にし、又は符號を附して特に教科に適する部分を示して置きました。これは固より編者の考を示したもので、必ずしも拘はるべきものではありません。要は本叢書の全本、抄本兩性質兼有の方針を酌んで、兩者の長短を以て互に補はせて下されれば本望であります。

一、本文の理解を助くべき系圖、小傳、年表、索引の類はそれぞれの本の性質を考へ、その必要に應じて適宜選定して成るべくこれを掲げた積りであります。

一、公務多忙の私としては、この企畫の全部を私一人の手で完成する

ことを得ませんので、それら特殊の研究を有つてをられる新進の學者諸君の協力を請ふことにいたしました。若し本叢書にして學界と教育界とに少しでも裨補することが出来ましたら、それはそれ等の人々の努力の賜物であります。

編者

例言

- 一、本書は高等諸學校の國語教科書として編纂したものであります。
- 一、本書は曩に編纂した「俳文學集」の中、特に「奥の細道」のみを研究される方々の便宜のために、その一篇だけをとつて一卷に纏めたものであります。
- 一、本叢書はみな全本主義のもとに編纂されてをります。本書は分冊といたしましたが、「奥の細道」全部を収めてをりますので、猶この主義に副つてゐる次第であります。
- 一、本書は舊洒竹文庫所藏の素龍清書本を底本として、出来るだけ忠實にこれを活字に移したものであります。従つて漢字・假名遣等もすべて原本のまゝでございます。

たゞ講讀に便ならしめる爲めに、句讀點・濁點等を施すことに致しました。比校に當り永機本・鶯宿本一葉集・菅菰抄等を参照いたしました。が本文には記入せず、頭註の中に加へることゝいたしました。

一、 原本には全く挿圖がありませんが、本書には本文理解上適當と思はれる地圖・繪畫・寫眞等を挿入することにいたしました。併せて俳文學の趣味を添へることをも心がけました。

一、 本書の頭註は特に必要とみとめるものゝ外は、一々其の據る所を附記いたしませんでしたが、その註釋書は新古とも殆どすべてにわたつて参照いたしました。こゝに記して感謝の意を表する次第でございます。

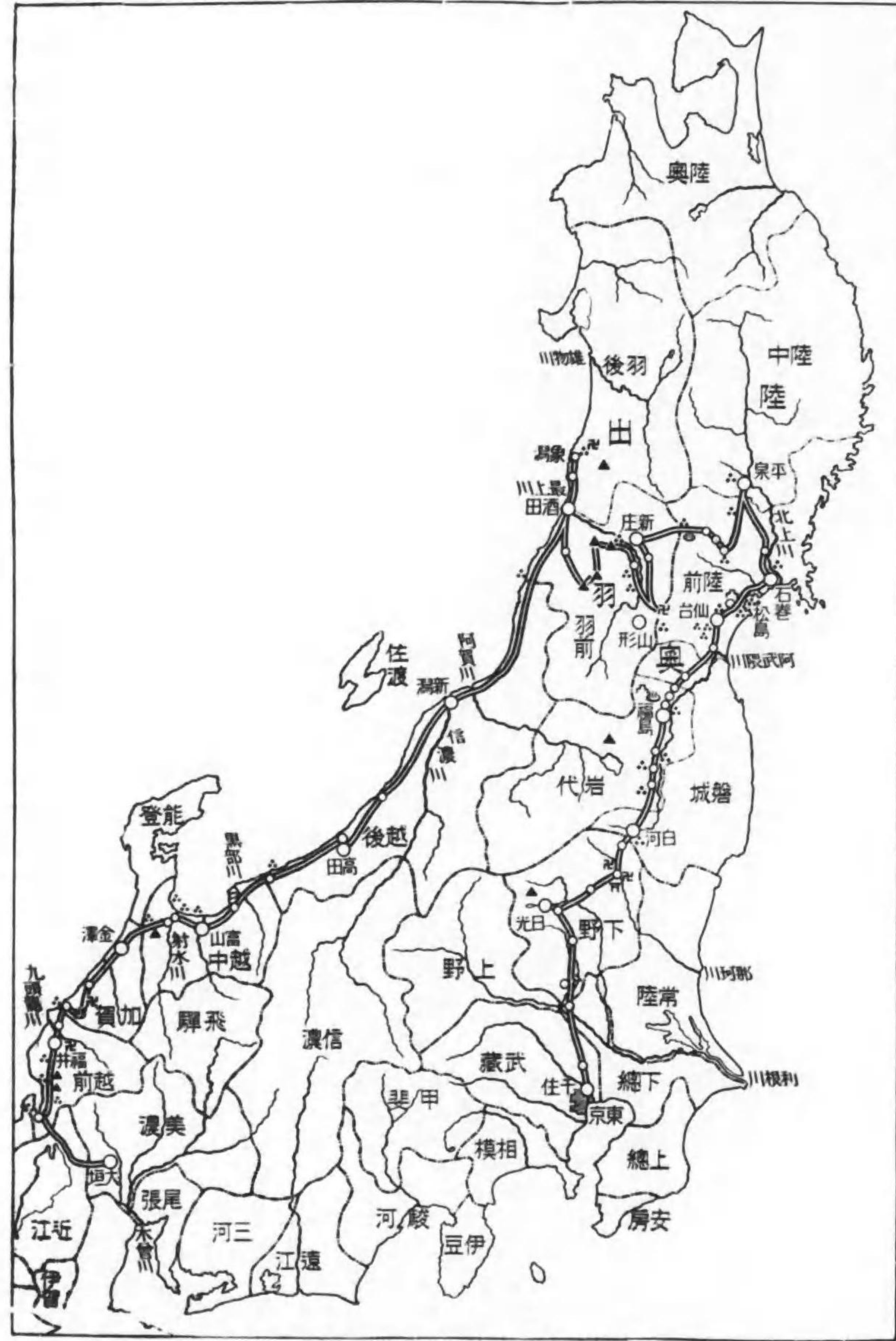
昭和五年三月



奥の細道 (素龍清書本)

酒竹文庫所蔵

芭蕉足跡略圖



奥の細道 (素龍清書本)

酒竹文庫所蔵

此一書ハ芭蕉翁奥明乃紀行ノ書
 素庵ノ筆也其紙五寸五歩横寸
 七条紙の重八寸二首尾小白紙と那小
 外ノ素龍故ニ此界紙成紙の長
 紙榮乃系和紙金の為補らば
 る自地よたくのわろ乃と自筆よ
 て海身一終小遷紀の後以人志
 作らば又其書の言ハ人志

- (一)月日は百代の過客—李太白の春夜宴桃李園序に「夫天地者萬物之逆旅。光陰者百代之過客。而浮世若夢。爲歡幾何。」とあるに依り。
- (二)古人も多く云々—芭蕉の日頃私淑したりし、李白、杜甫、西行宗祇などをさす。
- (三)去年の秋—元祿元年の九月更科の旅を終へて江戸の草庵に歸りしことをいふ。
- (四)白川の關—磐城國白川町の東南三里餘の地にあり。能因法師の「都をば霞と共にたちしかど秋風ぞ吹く白川の關」の歌も思ひあはせし文のさまなり。
- (五)そとろ神のものにつきて—身のまはりのもの、みなそとろに旅心を誘ふをいふ。菅菰に「心のあはたしきことにて神は嘘へものなり」といふはあたれり。
- (六)三里に灸すゆる—灸點の語。膝頭の下外側のやまくぼめる所
- 挿圖—芭蕉庵址圖(文久二年改正版による)圖中紀伊殿とあるは、もと松平遠江守の邸なり。

奥の細道



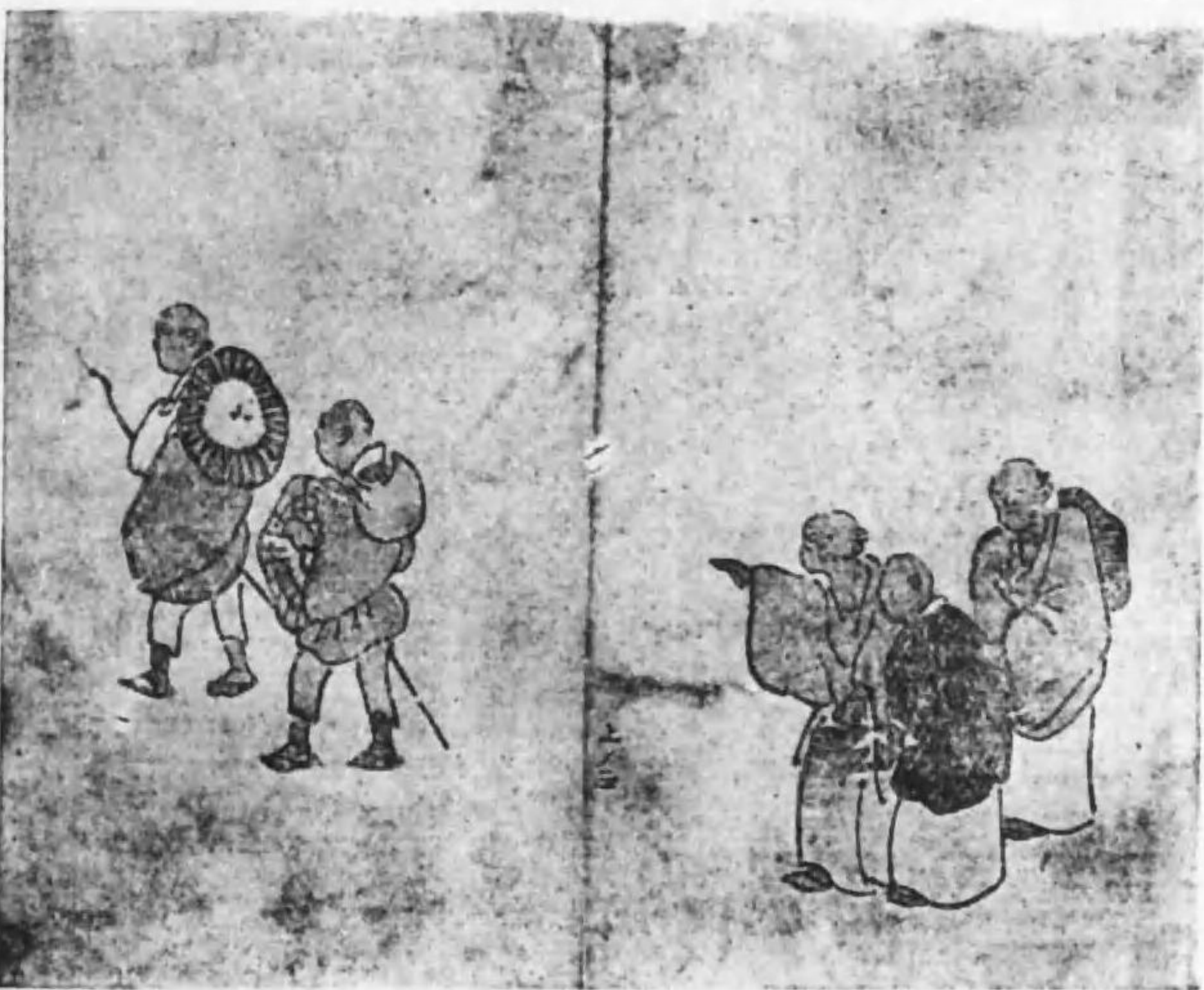
奥の細道

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず。海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて、やゝ年も暮、春立る霞の空に白川の關こえんと、そとろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず。もゝ引の破をつり、笠の緒付かえて、三里に灸すゆるより、松島の月先

- (一)杉風—江戸の人芭蕉の門人。通稱、鯉屋市兵衛。享保十七年歿。別墅は深川六間堀にありし探茶庵のこと。
- (二)面八句—連句を記す折りたる懷紙の第一面をいふ。
- (三)上野谷中の花—上野は東叡山寛永寺を中心とし、谷中は上野の西北長耀山感應寺を中心とし共に江戸の櫻の名所。
- (四)又いつかはと心ぼそし—西行法師の「かしこまるしてに泪のかゝるかな又いつかはと思ふ哀に」(玉葉集)の歌を思ひうかべし文體也。
- (五)千じゆ—千住。荒川に臨む奥州街道第一次の宿場。
- (六)鳥啼き魚の目は泪—杜市の「春望」の時に「國破山河在。城春草木深。感時花濺淚。恨別鳥驚心」などの句あるに由るか。或はたゞ當時觸目の鳥、魚に別離の情を寄せたる句なりとも解し得べし。

心にかゝりて、住る方は人に譲り、杉風が別墅に移るに
 草の戸も住替る代ぞひなの家
 面八句を庵の柱に懸置、彌生も
 末の七日、明ぼの空朧ととし
 て、月は在明にて光おさまれる
 物から、不二の峯幽にみえて、
 上野谷中の花の梢又いつかはと
 心ぼそし。むつまじさかざりは
 宵よりつとひて舟に乗て送る。
 千じゆと云所にて船をあがれば
 前途三千里のおもひ胸にふさが
 りて、幻のちまたに離別の泪を
 そぐ。

行春や鳥啼魚の目は泪



- (一)吳天に白髮の恨をかきぬ—諸曲葛城には「笠は重し吳山の雪、香は香し楚地の花」の句あり。又「詩人玉屑」には「笠重吳天雪」の句あり。
- (二)早加—今の草加町。千住の北二里餘、日光道中の宿驛。
- (三)室の八島—草加より二十餘里の地。下野國府村大字惣社にあり。この地にある大神神社を室八島大明神とよべり。和漢三才圖會云。「室八島大明神在惣社村。社領五十石祭神不二淺間權現之祖神也。別當神宮寺。社人十二人。野中有清水。其水氣上如煙。歌人稱之室八島煙。」
- (四)曾良—信州下諏訪の人。芭蕉に師事す。河合氏、通稱物五郎、寶永六年歿す。
- (五)木の花さく—姫—木花開耶姫。大山祇神の女にして瓊々杵尊の后。
- (六)富士一體也—(三)の項參照。



是を矢立の初として、行道なをすまらず。人とは途中に立ならびて、後かげのみゆる迄はと見送なるべし。ことし元祿二とせにや、奥羽長途の行脚、只かりそめに思ひたちて、吳天に白髮の恨を重ぬといへ共、耳にふれていまだめに見ぬさかひ、若生て歸らばと、定なき頼の末をかけ、其日漸早加と云宿にたどり著にけり。瘦骨の肩にかゝれる物先くるしむ。只身すがらにと出立侍を、番子一衣は夜の防ぎ、ゆかた雨具墨筆のたぐひ、あるはさがたき餞などしたるは、さすがに打捨がたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。
 室の八島に詣ず。同行曾良が曰、此神は木の花さくや姫の神と申て、富士一鉢

(一)無戸室一ウツムロ。戸無き室。和名抄に「日本紀私紀云、無戸室宇都無路」

(二)焼給ふちかひのみ中に云々。この傳説古事記上卷に云はし。姫一夜に御懷妊ありしを命に疑はれ、怒つて無戸室に入り給ひ火を室に放ち給ふ。その烟の中に神々生れ出て給へるをいふ。

(三)このしろといふ魚を禁ず。このしろ(鱸)をやく時は人をやく臭ひありとて、人の代りにこの魚をやくてのがれし傳説あるにありて、この魚を食するを禁ぜしなり。

(四)剛毅木訥論語に「子曰、剛毅木訥近仁」

(五)二荒山一日光名所記に云ふ。八代下野國二荒山は、人皇四十八代帝稱徳天皇の御宇、神護景雲元年勝道上人の開創也。中略)猶年ありて弘法大師登山し給ひ、二荒を日光と改め給ふ。又慈覺大師も登山し給ひ、所々に堂社を營み給ふ。

(六)黒髮山一男體山のこと。山の形女の髪を洗亂するが如くなる故にこの名ありともいひ、又常に黒雲掩ふが故に名づくともいへり。黒髮山の雪をよめる歌少からず。身の上にかゝらむ事ぞ遠からぬくろがみ山にふれる白雪(新後拾遺集、輿政)

也。無戸室(一)に入て焼給ふちかひ(二)のみ中に、火と出見のみこと生れ給ひしより、室の八嶋と申。又煙を讀習し侍もこの謂也。將(三)このしろといふ魚を禁ず。縁記の旨世に傳ふ事も侍し。

卅日日光山の禁に泊る。あるじの云けるやう、我名を佛五左衛門と云。萬正直を旨とする故に、人かくは申侍ま、一夜の草の枕も打解て休み給へと云。いかなる佛の濁世塵土に示現して、かゝる桑門の乞食順禮ごときの人をたすけ給ふにやと、あるじのなす事(四)に心をとめてみるに、唯無智無分別にして、正直偏固の者也。剛毅木訥(五)の仁に近きたぐひ、氣稟の清質尤尊ぶべし。

卯月朔日、御山に詣拜す。往昔、此御山を二荒山と書しを、空海大師開基の時、日光と改給ふ。千歳未來をさとり給ふにや。今此御光一天にかゝりて、恩澤八荒にあふれ、四民安堵の栖穩なり。猶憚多くて筆をさし置ぬ。

あらたうと青葉若葉の日の光

黒髮山は霞かゝりて雪いまだ白し。

剃捨て黒髮山に衣更曾良

曾良は河合氏にして惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべて、予が薪水の勞をたすく。このたび、松しま象瀉の眺共にせん事を悦び、且は羈旅の難をいたはらんと、旅立曉、髪を剃て墨染にさまをかえ、惣五を改て宗悟とす。仍て黒髮山の句有。衣更の二字力ありてきこゆ。

廿餘丁山を登つて瀧有。岩洞の頂より飛流して百尺、千岩の碧潭に落たり。岩窟に身をひそめ入て、瀧の裏よりみれば、うらみの瀧と申傳え侍る也。

暫時は瀧に籠るや夏の初

那須の黒ばねと云所に知人あれば、是より野越にかゝりて直道をゆかんとす。遙に一村を見かけて行に、雨降日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明れば又野中を行。そこに野飼の馬あり。草刈おのこになげきよれば、野夫といへどもさすがに情しらぬには非ず。いかゞすべきや。されども此野は縦横にわかれて、うわく敷旅人の道ふみたがえんあやしう侍れば、此馬のとゞまる所にて馬を返し給へとかし侍ぬ。ちいさき者ふたり、馬の跡したひてはしる。獨は小姫にて名をかさねと云。聞なれぬ名のやさしかりければ、

(一)うらみの瀧一阿含瀧、荒澤瀧ともいふ。大谷川の支流荒澤川にかゝる。

(二)瀧に籠るや夏の初。夏の初。佛者、陰曆四月十六日より七月十五日まで九十日間(一説に四月八日より七月八日迄)一室内に禁足して精進齋し、讀經などに暮すをいふ。安居(アング)夏行(ゲギヤウ)等ともいふ。

- (一) 館代—城代の意に用ひしなるべし。
- (二) 淨坊寺何がし—黒羽藩の家老淨坊寺圖書のこと。佛號を桃雪といひ、芭蕉と知己なりしこと文面にあらはる。
- (三) 桃翠—淨坊寺圖書の弟。鹿子加善太夫といふ。
- (四) 犬追物の跡を—見し—那須野にて犬追物のありしこと、謡曲殺生石にも見えればかゝる傳説ありしによりて其あとをも附會せしならん。
- (五) 那須の篠原—曾朝の歌「ものふの矢並つくるふ小手の上に霞たばしる那須の篠原—」
- 挿圖—那須野(菴頭奥の細道所載)
- (六) 玉藻の前の古墳—玉藻の前は和漢三才圖會等にも見え、近衛帝の寵姫にして金毛九尾の狐の化身といふ。三浦介義明、千葉介常胤勅によりてこれを那須野に退治したり。後狐の靈石となしてかの殺生石となりて害をなしたりと傳ふ。今、川西町に玉藻稻荷あり。その境内の狐塚は其の古墳なりといふ。
- (七) 修驗光明寺—修驗道の寺、餘瀨村にあり。
- (八) 行者堂—修驗道の開祖、役行者の像を安置する堂。

かさねとは八重撫子の名成べし 曾良
 頓て人里に至れば、あたひを鞍つぼに結付
 て馬を返しぬ。

黒羽の館代淨坊寺何がしの方に音信る。思
 ひかけぬあるじの悦び、日夜語つゞけて、
 其弟桃翠など云が朝夕勤とぶらひ、自の家
 にも伴ひて親屬の方にもまねかれ、日をふ
 るまゝに、日とひ郊外に逍遙して、犬追物
 の跡を—見し、那須の篠原をわけて玉藻の
 前の古墳をとよ。それより八幡宮に詣。與
 市扇の的を射し時、別しては我國氏神正八まんとかひしも此神社にて侍と聞
 ば、感應殊しきりに覺えらる。暮れば桃翠宅に歸る。
 修驗光明寺と云有。そこにまねかれて行者堂を拜す。

夏山に足駄を拜む首途哉



(一) 雲岸寺—雲巖寺のこと。臨濟宗、那須郡須賀川村にあり。

(二) 佛頂和尚—芭蕉參禪の師。鹿島根本寺の開山にして、始め深川長慶寺に住す。後雲巖寺に隱栖し、正徳五年十二月長慶寺に寂す。

(三) 十景—玉机峯、玲鏡岩、水分石、龍雲洞、ト梅林、千丈岩、竹林塔、海岸閣、飛雪亭、鐵蓋峯、(菅菰抄)

(四) 妙禪師の死關—原妙禪師は蘇州吳江の人。南宋の高僧。其の隱栖の洞房を死關と名づけ、遂にその中に寂せり。

(五) 法雲法師の石室—法雲は梁時代の高僧。庵を岩石の間に結びて法をとけり。

(六) 殺生石—那須温泉湯本にあり玉藻前の傳説に出でたる石。諸曲殺生石に「それは那須野の殺生石とて人間は申すに及ばず鳥類畜類までもさはるに命なし」といひその傳説を詳説せり。

當國雲岸寺のおくに、佛頂和尚山居跡あり。

豎横の五尺にたらぬ草の庵
 ひすぶもくやし雨なかりせば

と松の炭して岩に書付侍りといつぞや聞え給ふ。其跡みんと雲岸寺に杖を曳ば、人々すゝんで共にいざなひ、若き人おほく道のほど打さはぎておぼえず彼禁に到る。山はおくあるけしきにて、谷道遙に、松杉黒く苦したゝりて、卯月の天今猶寒し。十景盡る所橋をわたつて山門に入。

さて、かの跡はいづくのほどにやと、後の山によぢのぼれば、石上の小菴岩窟にむすびかけたり。妙禪師の死關、法雲法師の石室をみるがごとし。

木啄も庵はやぶらず夏木立

と、とりあへぬ一句を柱に残侍し。是より殺生石に行。館代より馬にて送らる。此口付のおのこ、短冊得させよと乞。やさしき事を望侍るものかなと、

野を横に馬牽むけよほとゝぎす

殺生石は温泉の出る山陰にあり。石の毒氣いまだほろびず。蜂蝶のたぐひ、眞

(一)清水流るゝの柳—新古今集巻二に一道のべに清水流るゝ柳蔭しばしとてこそ立ちとまりけれ—西行法師の歌による。

(二)蘆野の里—奥州街道の一宿驛(三)白川の關—前出一頁参照。

(四)いかで都へと—拾遺集、平兼盛の歌「たよりあらばいかで都へ告げやらむ今日白河の關は越えぬと」。

(五)三關—奥羽の三關をいふ。磐城の白河の關、常陸の勿來の關、羽前の念珠が關これなり。

(六)秋風を耳に残し—都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關(後拾遺集、能因法師)。

(七)紅葉を佛にし—都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白河の關(千載集、賴政)。

(八)雪にもこゆる—千載集露旅の歌「東路も年も末にやなりぬらむ雪ふりにけり白河の關」。

(九)古人冠を正し—云々—新輔の袋草紙に竹田大夫といふ者白河の關を過ぐる日特に衣冠を正してゆける故事あり。

(一〇)會津根—磐梯山のこと。

(一一)かげ沼—鏡沼ともいふ。岩代國鏡石村にあ。

(一二)等窮—須賀川の人、相良氏初め未得に學び後蕪門に入る。

(一三)臨第三とつゞけて—今「雪まろげ」よりその表六句をあぐれば、

風流のはじめや奥の田植哥
覆盆を折つて我まうけ草 芭蕉
水せきて晝寐の石や直すらん 等窮
籬に鮮の聲いかすなり 會良
一葉して月に益なき川柳 射
日履履根ふく村ぞ秋なり 長

(二)檜皮の宿—安積郡山野井村大字日和田。古名安積の宿。

(三)あさか山—古來多くの歌によまれたるところ。萬葉集、古今集に例歌あり。また沼も歌枕として名高し。

(四)かつみ—眞菰の異名。古今集卷十四、題しらず「みちのくのあさかの沼の花かつみかつみる人に戀ひや渡らむ」などあり。

砂の色の見えぬほどかさなり死す。又清水ながるゝの柳は、蘆野の里にありて田の畔に残る。此所の郡守戸部某の、此柳みせばやなど、折くゝにの給ひ聞え給ふを、いづくのほどにやと思ひしを、今日此柳のかけにこそ立より侍つれ。

田 一枚植て立去る柳かな

心許なき日かず重るまゝに、白川の關にかゝりて旅心定りぬ。いかで都へと便求しも斷也。中にも此關は三關の一にして、風驟の人心をとどむ。秋風を耳に残し、紅葉を佛にして、青葉の梢猶あはれ也。卯の花の白妙に、茨の花の咲そひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裝を改し事など、清輔の筆にもとどめ置れしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着かな 會良

とかくして越行まゝに、あぶくま川を渡る。左に會津根高く、右に岩城、相馬、三春の庄、常陸下野の地をさかひて山つらなる。かげ沼と云所を行に、今日は空曇て物影うつらず。すか川の驛に等窮といふものを尋て四五日とどめらる。先白河の關いかにこえつるやと問。長途のくるしみ身心つかれ、且は風景に魂



間に覺られてものに書付侍る。其詞、

栗といふ文字は、西の木と書て、西方淨土に便ありと、行基菩薩の、一生杖にも柱にも此木を用給ふとかや。

世の人の見付ぬ花や軒の栗

等窮が宅を出て五里計、檜皮の宿を離れてあさか山有、路より近し。此あたり沼多し。かつみ刈比もや、近うなれば、いづれの草を花かつみとは云ぞと人々に尋侍れども、更知人なし。沼を尋、人にとひ、かつみくと尋ありきて、日

(一) 黒塚の岩屋—安達ヶ原にありて、阿武隈河の岸大平村にあり。拾遺集—陸奥の安達が原の黒塚に鬼こもれりといふはまことか—等の傳説ある地なり。

(二) しのぶもぢ摺—もぢ摺石は、陸奥衛に—福島より山口村へ一里、此處より阿武隈川のわたりを越え、山のさしかゝり、谷間に文字摺の石あり。古今集の巻十三。河原大納言の歌—みちのくわのしのぶ文字ずり誰れ故に亂れむと思ふ我れならなくに—

(三) 月の輪の渡—文字摺石より三十丁餘、五十部の渡のこと。

(四) 佐藤庄司—佐藤繼信、忠信の父。信夫庄司元治のこと。

(五) 庄司が舊館—庄司が大島城のあたりといふ、丸山城ともいへり。

(六) 二人の嫁がしるし—繼信忠信兄弟の嫁の墓標をいふ。この妻女のこと橘南嶽の東遊記によりて著名なり。二人の妻女甲冑をよろひ、夫のまねして母なる人を慰めしこと世の知る所なり。

(七) 涙の石碑—陸奥の石碑なり。晋の羊祜の故事。祐襄陽の守となり民心服す。卒するに及び民之がために峴山に碑を建つ。望むもの流涕せざるなし。杜豫に望れに陸奥の碑と名づく。晋書に詳し。

(八) 飯塚—飯坂温泉のこと。

は山の端にかゝりぬ。二本松より右にきれて、黒塚の岩屋一見し、福嶋に宿る。あくれば、しのぶもぢ摺の石を尋て、忍ぶのさに行。遙山陰の小里に、石半土に埋てあり。里の童部の來りて教ける。昔は此山の上に侍しを、往來の人の麥草をあらして、此石を試侍をにくみて、此谷につき落せば、石の面下さまにふしたりと云。さもあるべき事にや。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

月の輪のわたしを越て、瀬の上と云宿に出づ。佐藤庄司が旧跡は、左の山際一里半計に有。飯塚の里鯖野と聞て、尋く行に、丸山と云に尋あたる。是庄司が旧館也。禁に大手の跡など人の教ゆるにまかせて泪を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも二人の嫁がしるし先哀也。女なれどもかひくしき名の、世に聞えつる物かたと袂をぬらしぬ。涙の石碑も遠きにあらず。寺に入て茶を乞へば、爰に義經の太刀、辨慶が笈をとめて什物とす。

笈も太刀も五月にかざれ番帳

五月朔日の事也。其夜飯塚にとまる。温泉あれば湯に入て宿をかるに、土坐に

(一) 持病—胃病と痔疾。

(二) 桑折の驛—今の桑折町養意の盛地、奥州街道の一宿驛。

(三) 伊達の大木戸—伊達の關とも稱せられ、磐城國に入るの關門。

(四) 笠摺—越河の北にある坂路。

(五) 白石の城—奥州街道の宿驛、今の白石町。

(六) 笠嶋—郡の名にあらず。名取郡愛島村の小字。

(七) 藤中將實方—侍従藤原家時の子。大日本史によれば實方東山に遊びし折、雨を花の下に避けて誄せし歌につき、殿上にて藤原行成と争ひ、ために歌枕見て參れと陸奥守に任せられたり。遂に任國にて逝きしかば、後年西行その塚に詣て「くちもせぬその名ばかりをといめおきて枯野の薄かたみにぞ見る」の詠あり。塚は今、名取郡愛島村大字鹽手にあり。

蓮を敷てあやしき貧家也。灯もなければ、ゐろりの火かげに寐所をまうけて臥す。夜に入て、雷鳴、雨しきりに降て、臥る上よりも、蚤蚊にせゝられて眠らず持病さへあこりて消入斗になん。短夜の空もやうく明れば、又旅立ぬ。猶夜の余波心すまらず。馬かりて桑折の驛に出る。遙なる行末をかゝえて、斯る病覺東なしといへど、羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路にしなん是天の命なりと、氣力聊とり直し、路縦横に踏で、伊達の大木戸をこす。笠摺、白石の城を過、笠嶋の郡に入れば、藤中將實方の塚はいつくのほどならんと人にとへば、是より遙右に見ゆる山際の里を、みのわ笠嶋と云。道祖神の社、かた見の薄、今にありと教ゆ。此比の五月雨に、道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながら眺やりて過るに、簀輪、笠嶋も五月雨の折にふれたりと、



笠島はいづこさ月のぬかり道

岩沼に宿る。

武隈の松にこそめ覺る心地はすれ。根は土際より二木にわかれて、昔の姿らしなはずとしらる。先能因法師思ひ出。往昔、むつのかみにて下りし人、此木を伐て名取川の橋杭にせられたる事などあればにや、松は此たび跡もなしとは詠たり。代々あるは伐、あるひは植繼などせしと聞に、今將千歳のかたちとほひて、めでたき松のけしきになん侍し。

武隈の松見せ申せ遅櫻と、舉白と云もの、餞別

したりければ、

櫻より松は二木を三月越

名取川を渡りて仙臺に入。あやめふく日也。旅宿をもとめて四五日逗留す。爰に畫工加右衛門と云ものあり。聊心ある者と聞て、知る人になる。この者、年比さだかならぬ名ところを考置侍ればとて、一日案内す。宮城野の萩茂りあひて、秋の氣色思ひやらる。玉田、よこ野、つゝじが岡はあせび咲ころ也。日影も

(一)武隈の松—歌枕の一。後拾遺集「たけくまの松はふた木を都人いかにと問はゞみきと答へむ。又源氏薄雲の巻に源氏の君の歌「おひそめし根もふかければたけくまの松に小まつの千代をならべむ」等あり。

(二)能因法師—後拾遺集、雜四、能因法師「みちの國に再び下りて後のたび武隈の松も侍らざりければよめる—たけくまの松はこのたび跡もなし千歳をへてやわれは來つらむ」。

(三)舉白—芭蕉の門人、草壁氏、江戸の人、元祿九年歿。

(四)名取川—仙臺の南を流る、川この川をよめる古歌多し。

(五)宮城野—みちのくの歌枕の一萩の名所。今、仙臺市の東郊、千載集、源俊賴朝臣の歌「さまゝに心ぞとまる宮城野の花いろゝ蟲のこゑ」新古今集、四行法師の歌「哀れいかに草葉の露のこぼるらむ秋風立ちぬ宮城野の原」等の歌少からず。

(六)玉田、横、つゝじが岡—みな陸奥の歌枕。仙臺市の郊外。俊賴の歌「とりつなげたまたよこのの放れ胸鬨が岡にあせみ咲くなら」。

(一)木の下—これまた歌枕の一。宮城野の南方薬師堂の附近。古今集東歌に「みさぶらひみ笠とまをせ宮城野の木の下露は雨にまされり」。

(二)おくの細道—仙臺より多賀の國府をへて鹽釜の方面へ通ずる小徑。

(三)十符の菅—十符の里は歌枕の一。古へ菅ごもの出てし地にて奥州の名所なり。仙臺の北東の方一二里の所にあり」と東遊記にも出てたり。

十符の菅菰、十符は十編の意、即ち編目の十筋ある菅菰のことをいふ。

(四)壺碑—仙臺より鹽釜に至る途中、多賀城驛より約一里、この石ぶみを詠る歌多し。新古今集右大將頼朝の歌「みちのくのいはて忍ぶはえぞ知ぬかきつくしてよつばの石ぶみ」山家集「みちのくの奥ゆかしくもおもほゆるつばの石文外の濱風」。

(五)惠美朝臣—惠美朝臣の事。惠美押勝の子。續日本紀によれば、天平寶字の初陸奥守となり、按察使兼鎮守府將軍となり、後兵部卿となり參議を拜せり。

もらぬ松の林に入て、爰を木の下と云とぞ。昔もかく露ふかければこそ、みさぶらひ三かさとよみたれ。薬師堂、天神の御社など拜て、其日はくれぬ。猶松嶋塩がまの所々畫に書て送る。且、紺の染緒つけたる草鞋二足餞す。さればこそ風流のしれもの、爰に至りて其實を顯す。

あやめ艸足に結ん草鞋の緒

かの畫圖にまかせてたどり行ば、おくの細道の山際に、十符の菅有。今も年々十符の菅菰を調べて、國守に献ずと云り。

壺碑 市川村多賀城に有

つばの石ぶみは、高サ六尺餘、横三尺斗歟。苔を穿て文字幽也。四維國界之數里をしるす。此城神龜元年按察使鎮守府將軍大野朝臣東人之所里也。天平寶字六年參議東海東山節度使同將軍惠美朝臣瀧修造而十二月朔日と有。聖武皇帝の御時に當れり。むかしよりよみ置る哥枕おほく語傳ふといへども、山崩川落て道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り代變して其跡たしかならぬ事のみを、爰に至りて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心

(一)野田の玉川—歌枕。宮城郡多賀城村にあり。新古今集卷三、一みちのくにまかりける時よみ侍りける。能因法師、夕ざれば潮風こしてみちのくの野田の玉川千鳥鳴くなり。

(二)沖の石—陸奥衛によれば、八幡利百姓の裏の池中に三間四方の岩あり。これを土俗沖の石と呼べりと。蓋し「わが袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知られ乾くまもなし」千載集、讃岐の歌によりし附會なるべし。

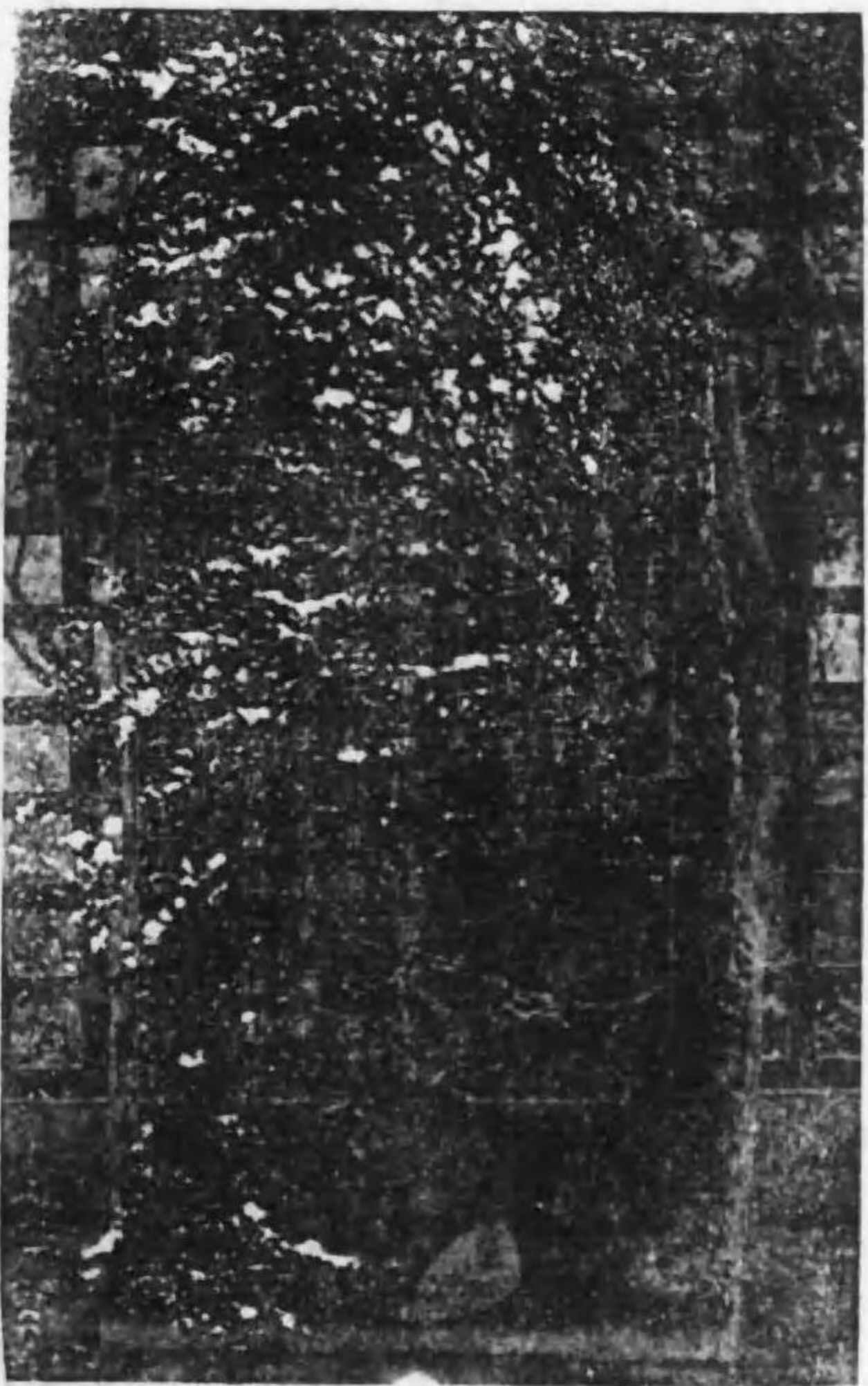
○挿畫—多賀城の碑、

(三)末の松山—歌枕。これまた多賀城村にあり。古今集卷二十一「君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山波もこえなむ」後撰集戀部に「心かはりける女に、人にかはりて、清原元輔、契りきなかたみに袖をしぼりつゝ、末の松山浪こさじとは」

(四)はねをかはし枝をつらぬる契—白樂天の長恨歌に「在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝」

(五)籬が島—鹽釜の東方十餘町の海上にあり。古今集卷二十一「わがせこを都にやりてしほがまの籬が島のまつぞこひしき」

○(六)(七)(八)の項次頁にあり。



を関す。行脚の一徳、存命の悦び、羈旅の勞をわすれて泪も落るばかり也。

それより野田の玉川沖の石を尋ぬ。末の

松山は寺を造て末松山といふ。松のあひく—皆墓はらにて、はねをかはし枝をつらぬる契の末も、終はかくのごときと悲しさも増りて、塩がまの浦に入相のかねを聞。五月雨の空聊はれて、夕月夜幽に、籬が嶋もほど近し。蟹の小舟こぎつれて、肴わかつ聲くくに、つなでかなしもとよみけん心もしられて、いと哀也。其夜、目盲法師の琵琶をならして、奥上るりと云ものをかたる。平家

○前頁のつゞき

(六)つなでかなしも—古今集卷二十一「陸奥はいつくはあれど鹽釜の浦こぐ舟の綱手かなしも」

(七)奥上るり—仙臺淨瑠璃ともいふ。昔時奥羽地方に流行せし淨瑠璃、扇子拍子にて語りしものと見ゆ。

(八)平家—平家琵琶のこと。平家物語。琵琶に合せて語るもの、後鳥羽院の時盲人生佛の語り出しに始まる。今日尙存せり。

(一)舞—幸若舞のこと。足利時代桃井幸若丸の創めたる舞曲。扇拍子にて大小の鼓を用ふ。

(二)鹽がまの明神—鹽竈神社のこと。祭神は武甕槌神、經津主神、別宮に鹽土老翁神。國幣中社。和漢三才圖會に鎮座の時代未詳とあり。

(三)國守再興—伊達政宗、慶長十二年修造せるをさす。

(四)文治三年—皇紀一八四七年、後鳥羽天皇の御代。

(五)和泉三郎—藤原秀衡の第三子忠衡のこと。父の遺命を奉じ、義經に孤忠を守り、義經の死後終に兄泰衡のために殺さる。

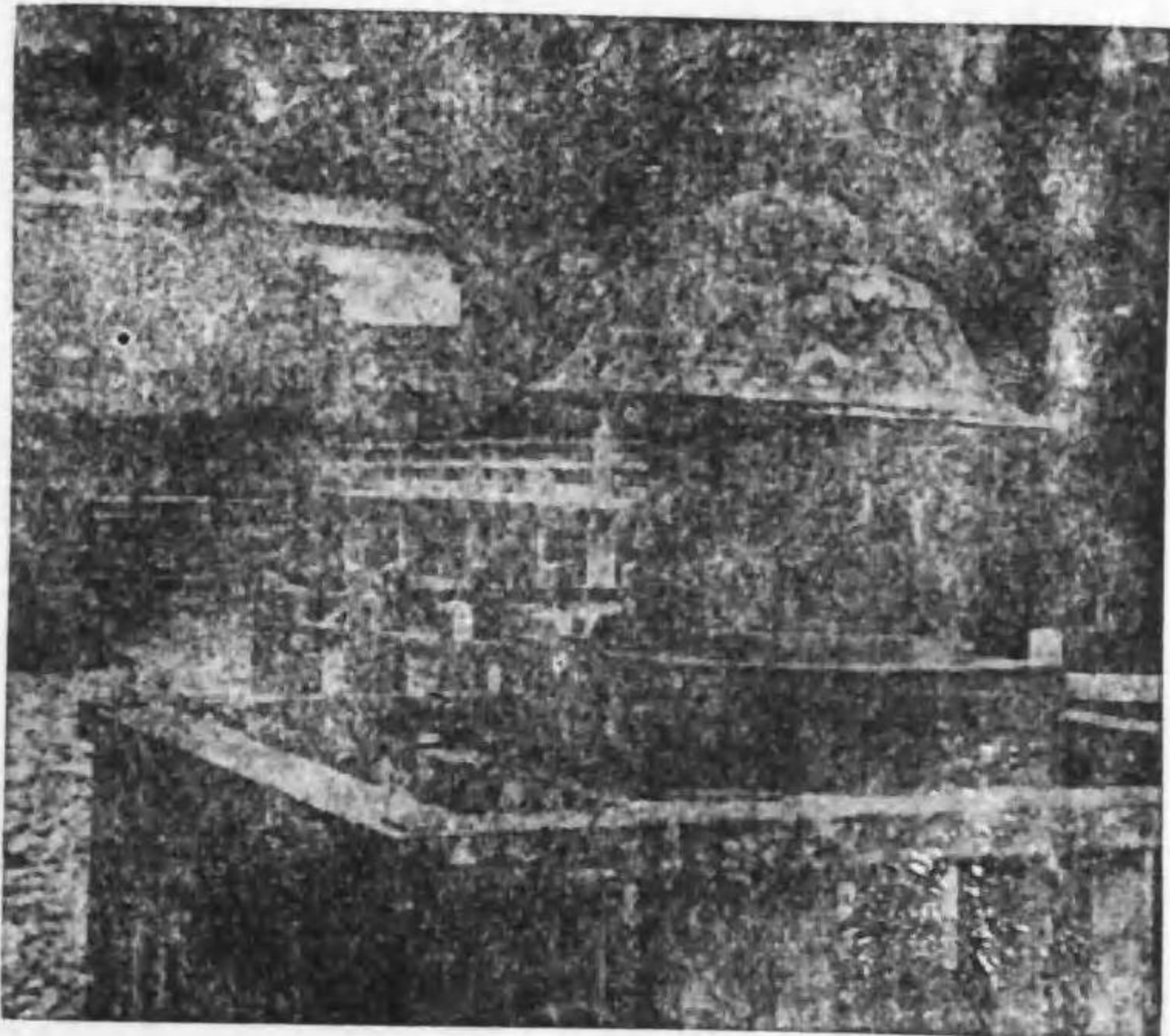


にもあらず。舞にもあらず。ひなびたる調子うち上て、枕ちかうかしましけれど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから、殊勝に覺らる。早朝、塩がまの明神に詣。國守再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽さらびやかに、石の階九段に重り、朝日あけの玉がきをかきやかす。かゝる道の果、塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ吾國の風俗なれといと貴けれ。神前に古き寶燈有。かねの戸びらの面に、文治三年和泉三郎奇進と有。五百年來の佛、今日の前にかびて、そゝろに珍し。渠は勇義忠孝の士也。佳命今に至りてしたはずといふ事なし。誠人能道を勤義を守べし。名もまた是にしたがふと云り。日既午にちかし。船をかりて松嶋にわたる。其間二里餘、雄嶋の磯につく。

(一) 扶桑—東海中にありといふ大なる神木。轉じて東方日出處にある神仙國。支那より日本を呼ぶ。

○挿圖—靈釜神社の寶燈。

(二) 洞庭、西湖—洞庭湖は湖南省にあり。風光明媚、杜甫の詩に、「昔聞洞庭水。今上岳陽樓。吳楚東南坼。乾坤日夜浮。」といへる外多くの詩歌となれり。西湖は浙江省にあり。周圍一里餘風光絶佳。
(三) 浙江—浙江省、杭州府にあり。錢塘江ともいふ。



(四) 大山つみの神—古事記に「次生山神名大山津見神」とありて山を司る神。

抑ことふりにたれど、松嶋は扶桑第一の好風にして、凡洞庭西湖を恥ず。東南より海を入れて、江の中三里浙江の潮をたふ。鳴く—の數を盡して、敬ものは天を指、ふすものは波に匍匐。あるは二重にかさなり三重にたふみて、左にわかれ、右につらなる。負るあり。抱るあり。兒孫愛すがごとし。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹たはめて、屈

- (一) 雄嶋が磯—松嶋灣觀瀾亭の南數町、渡月橋を以て陸を通ず。
- (二) 雲居禪師—京都妙心寺の僧。政宗の遺命にて瑞巖寺を中興す。
- (三) 松嶋や—この句猿蓑集に「松嶋一見の時、千鳥もかるや鶴の毛衣、とよめりければ」と前書あり。
- (四) 素堂—甲斐の人、山口氏、名は信章江戸葛飾に住し、芭蕉と交通せり。季吟の門人、葛飾風の祖、享保元年歿。
- (五) 原安適—江戸深川の醫師。和歌をよくす。
- (六) 濁子—中川氏、美濃大垣の人、江戸に勤番して蕉門に入る。
- (七) 瑞岩寺—松嶋圖誌によれば、仁明天皇の天長五年慈覺大師の創建、松嶋寺と稱す。其後北條時頼此處に來り法心上人(眞壁平四郎入道)と約し禪宗となし松嶋山圓福寺といふ。後幾多の變遷あつて、慶長十年四月政宗公造營し伊達家の宗廟とす。寛永十三年義山公遺命により雲居禪師を請し中興開山とし、瑞岩圓福寺と稱せり。
- (八) 眞壁平四郎—法心上人の俗名。宋の時徑山寺の無準に従ひて法を受け歸國して此寺を開けり。

雄嶋が磯は地つゞきて、海に出たる嶋也。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。將、松の木陰に世をいとふ人も稀—見え侍りて、落穂松笠など打けぶりたる草の菴閑に住なし、いかなる人とはしられずながら、先なつかしく立寄ほどに、月海にうつりて晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求めば、窓をひらき二階を作て、風雲の中に旅寐すること、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松嶋や鶴に身をかれほとゝぎす 曾良

予は口をとぢて眠らんとしていねられず。旧庵をわかるゝ時、素堂松嶋の詩あり。原安適松がうらしまの和哥を贈らる。袋を解てこよひの友とす。且杉風濁子が發句あり。

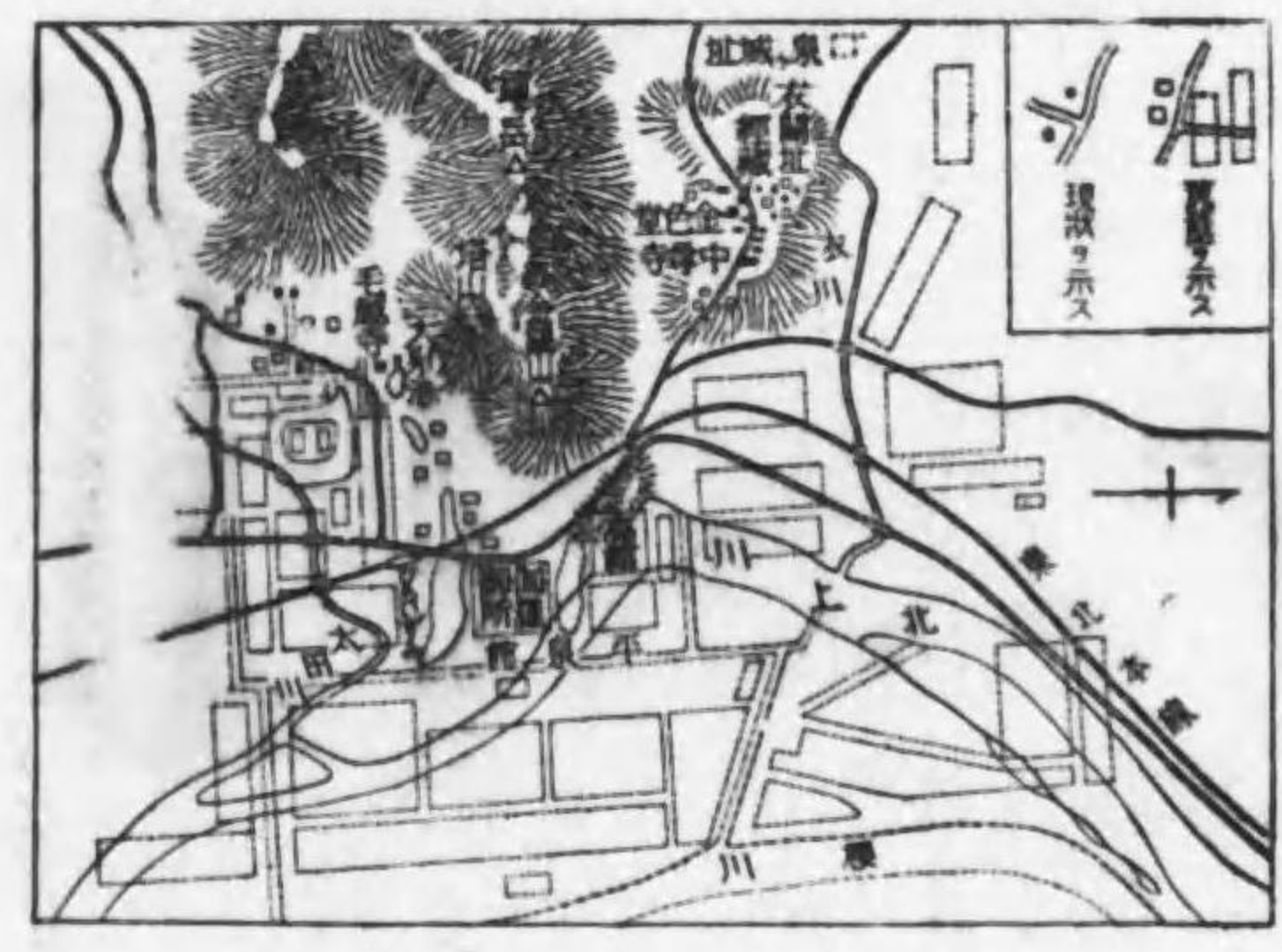
十一日瑞岩寺に詣。當寺三十二世の昔、眞壁の平四郎出家して入唐、歸朝の後



奥の細道

- (一)見佛聖—見佛上人のこと。雄島に庵を結び、勤苦十二年法華經を誦すること六萬回といふ。
- (二)あねはの松、緒たえの橋—共に奥州街道にある歌枕。
- (三)石の巻—北上川の川口、松島を去る三里餘、良港。
- (四)こがね花咲く—萬葉集卷十八大伴家持の歌「天皇の御代榮えむと東なるみちのく山に金花咲く」
- (五)金花山—牡鹿半島の極端、海中に屹立する一島嶼。
- (六)袖のわたり—歌枕。北上川にのぞむ。新後拾遺集相模「陸奥の袖のわたりの涙川心のうちに流れてぞ住む」
- (七)尾ぶちの牧—石巻の北一里許りの牧場。後撰集、よみ人知らず「みちのくのをふちの駒も野飼ふにはあれこそまされなつぐものかは」
- (八)まの、菅原—石巻の東北六里許の地。萬葉集卷三、笠郎女「陸奥の眞野の草原遠けども面影にして見ゆとふものを」

開山す。其後に、雲居禪師の徳化に依て七堂葺改りて、金壁莊嚴光を輝、佛土成就の大伽藍とはなれりける。彼見佛聖の寺はいづくにやとしたはる。十二日、平和泉と心ざし、あねはの松、緒たえの橋など聞傳て、人跡稀に、雉乘蕘苑の往かふ道そこともわかず。終に路ふみたがえて石の巻といふ湊に出。こがね花咲とよみて奉たる金花山海上に見わたり、數百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて竈の煙立つけたり。思ひかけず斯る所にも來れる哉と、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。漸まどしき小家に一夜をあかして、明れば又しらぬ道まよひ行。袖のわたり、尾ぶちの牧、まの、萱はらなどよそめにみて、遙なる堤を行。心細き長沼にそよて、戸伊麻と云所に一宿して、平泉に到る。其間廿余里ほど、おぼゆ。



- (一)三代—藤原清衡、同基衡、秀衡の三代。
- (二)一睡の夢—枕既濟の枕中記云「道士呂翁得神術遊邯鄲道中過少年盧生、授之生枕而夢一生榮辱、欠伸而寤。黃梁尙未熟也」の故事。
- (三)金鶏山—高館の西南、秀衡山形を富士に象り、黄金の鶏を作りにて山上に埋めしといふ山。
- (四)高館—衣川館とも判官館といふ。義經堂を存す。
- (五)泉が城—泉三郎の館。
- (六)衣が關—高館の北方白鳥村にありし關。
- (七)國破れて山河在り云々—杜甫の春望の詩の一節に「國破山河在、城春草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心」の句あるに由れり。
- (八)兼房—義經の老臣増尾權頭。高館に於て義經と共に戦死す。
- (九)經堂—天仁元年、清衡の建立、本、珠蔭、一切經を藏す。
- (一〇)光堂—金色堂のこと。堀河帝の代藤原清衡の建立したるものなり。堂の廣さ三間四面、四本の柱は七寶莊嚴の卷柱十二光佛を圍現し柱梁には螺鈿珠玉を鏤む。佛像の壇下に清衡、基衡、秀衡三代の棺を納む。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金鶏山のみ形を残す。先高館にのぼれば、北上川南部より流る、大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入。康衡等が旧跡は、衣が關を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。偕も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり。城春にして草青みたりと、笠打敷て時のうつるまで、涙を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡
卯の花に兼房みゆる白毛哉 曾良

兼て耳驚したる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散うせて、珠の屏風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既類廢空虛の叢と成べきを、四面新に圍て、葺を覆て風雨を凌。暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨の降のこしてや光堂
南部道遙にみやりて、岩手の里に泊る。小黑崎、みつの小嶋を過て、なるこの

○前頁のつゞき

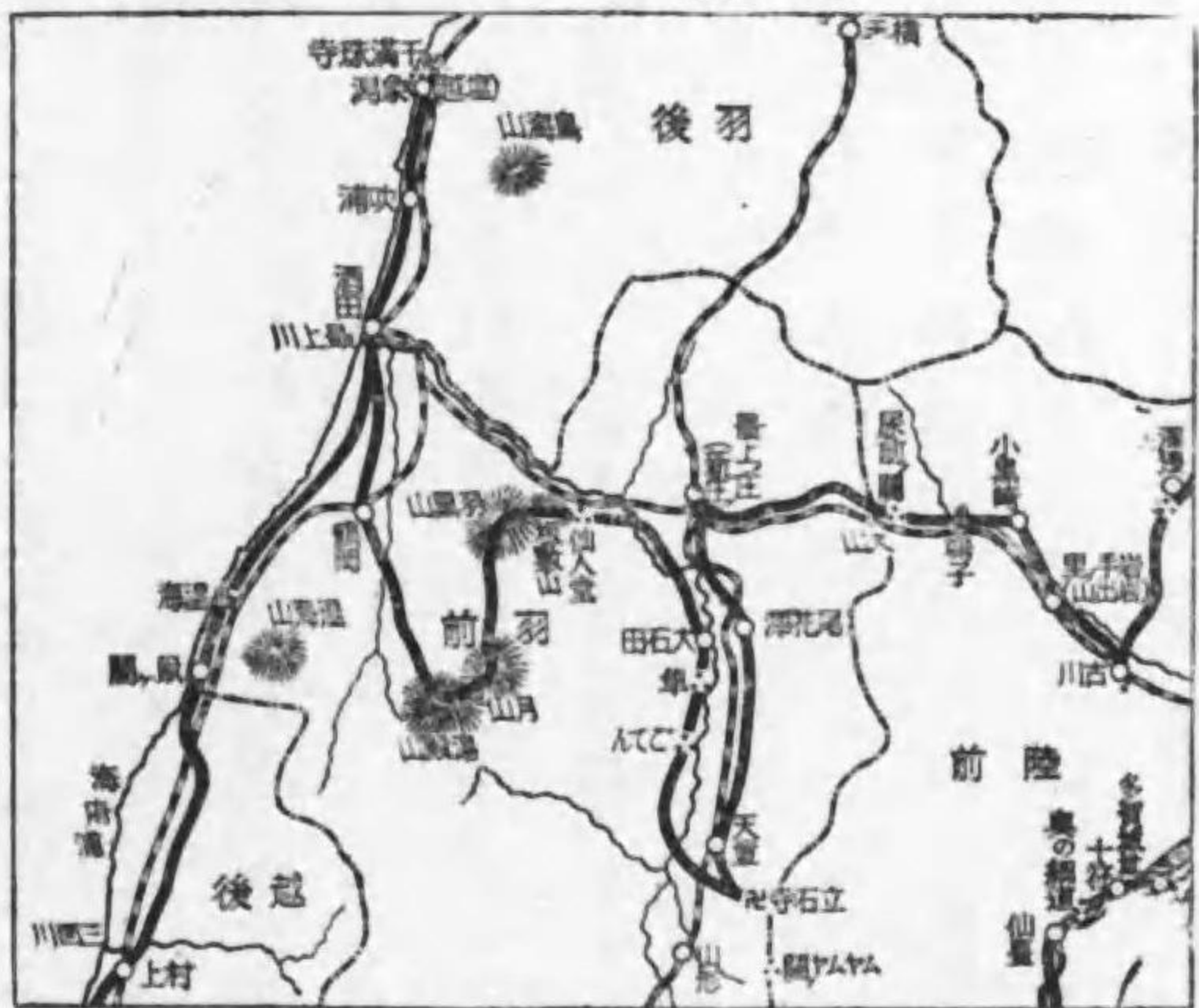
- (一)三尊—阿彌陀如來(中)勢至菩薩(左)觀世音菩薩(右)
- (二)四面新に圍みて—套堂といひ正應元年北條貞時の造營したるもの。この光堂、套堂共に今は保護建造物たり。
- (三)岩手の里—江合川にのぞむ岩出山町のこと。
- (四)小黒崎、みつの小島—共に岩出山より鳴子に至る道に沿ふ小驛。
- (五)なる子の湯—東北第一の稱ある今の鳴子温泉、陸羽線に沿ふ。
- (六)尿前の關—鳴子より新庄に至る道にある關所。
- (七)大山—中山越のこと。

(三)一鳥聲きかざ—王安石の鐘山の詩に「茅簷相對坐終日、一鳥不啼山更幽。」

湯より尿前の關にかゝりて、出羽の國に超んとす。此路、旅人稀なる所なれば、關守にあやしめられて、漸として關をこす。大山をのぼつて、日既暮ければ、封人の家を見かけて舍を求む。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿する枕もと

あるじの云、是より出羽の國に大山を隔て、道さだかならざれば、道しるべの人を頼て超べきよしを申。さらばと云て人を頼侍れば、究竟の若者、反脇指をよこたえ、椶の杖を携て、我々が先に立て行。けふこそ必あやうさめにもあふべき日なれと、辛き思ひをなして、後について行。あるじの云にたがはず。高山森々として一鳥聲きかざ木の下關茂りあひて夜る行がごとし。



(一)雲端につちふる—杜市の「鄭附馬潜耀宴洞中。」詩中に「已入風磴—雲端」の句あるに由る。雲の端に土ふるが如く暗きさまにいふ。

(二)最上の庄—新庄町のこと。

(三)尾花澤—羽前國、北村山郡尾花澤町。

(四)清風—尾花澤の人、鈴木八右衛門。紅花商。宗因門、おくれ双六、稻建の著あり。

(五)かひや—飼屋。養蠶の家をいふ。

(六)立石寺—山形市の東北三里餘山寺村にあり。貞觀二年、天台宗第二祖慈覺大師の創建、山門より奥の院までみな石段を以て形成す。三奇巖、七瀑、四十八瀑等あり。

雲端につちふる心地して、篠の中踏分く、水をわたり、岩に蹶て、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出づ。かの案内せしおのこの云やう、此みち必不用の事有。恙なうをくりまいらせて仕合したりとよろこびてわかれぬ。跡に聞てさへ胸とゞろくのみ也。

尾花澤にて清風と云者を尋ぬ。かれは富るものなれども、志いやしからず。都にも折るかよひて、さすがに旅の情をも知たれば、日比とゞめて長途のいたはりさまくにもてなし侍る。

涼しさを我宿にしてねまる也

這出よかひやが下のひきの聲

まゆはきを俤にして紅粉の花

蚕飼する人は古代のすがた哉 會良

山形領に立石寺と云山寺あり。慈覺大師の開基にして、殊清閑の地也。一見すべきよし人々のすゝむるに依て、尾花澤よりとつて返し、其間七里ばかり也。日いまだ暮ず。禁の坊に宿かり置て、山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし、

○挿圖—立石寺の一部

- (一)最上川—日本三急流の一。山形縣の中央を貫流す。吾妻山に源を發して酒田の海に入る。
- (二)古き俳諧の種—貞門淡林の徒の俳諧をさす。芭蕉の新風に對して古きといへり。
- (三)花の昔—古風の俳諧の盛んなりし頃をさす。
- (四)蘆角一聲云々—蘆角は胡笳ともいふ。蘆の葉を巻きこれをふく。その聲悲しき故に悲歌ともいふ。
- 岩參の詩に「君不聞胡笳聲最悲。紫髯綠眼胡人吹。(中略)胡人向月吹胡笳。胡笳怨今將送君。秦山遙望隴山雲。邊城夜々多愁夢。向月胡笳誰喜聞。(胡笳歌) (五)一巻—大石田、高野一巻の宅にて俳諧の會を催せしこと「雪まろげ」に出づ。その初表六句左の如し。
- 五月雨を集めて涼し最上川
- 岸に波をつなぐ船杭 一棧
- 瓜畑いざよふ空に影待て 曾良
- 里を向ふに桑の細道 川水
- 牛の子に心慰む夕まぐれ 榮
- 雨雲おもし悚の吟 翁

松柏年旧、土石老て、苔滑に岩上の院
 扉を閉て物の音きこえず。岸をめぐ
 り岩を這て、佛閣を拜し、佳景寂寞と
 して心すみ行のみおぼゆ。

閑さや岩にしみ入蟬の聲
 最上川のらんと、大石田と云所に日和
 を待。爰に古き俳諧の種こぼれて、忘
 れぬ花のむかしをしたひ、芦角一聲の
 心をやはらげ、此道にさぐりあしして、
 新古ふた道にあゆみまよふといへども
 みちしるべする人しなれば、ことは
 りなき一巻残しぬ。このたびの風流爰
 に至れり。
 最上川は、みちのくより出て、山形を



- (一)ごてん、はやぶさ—ごてんは碁點、碁石を打ちたる如く大岩の水中に見ゆるところ、準は水勢急なるところ、共に最上川の難所。
- (二)いなぶれの—古今集卷二十、「最上川のぼればくだる稻舟のいなにはあらずこの月ばかり」を思ひて記せるなり。
- (三)羽黒山—月山、湯殿山と共に羽前三山の名あり。
- (四)南谷—羽黒山、上南谷別院。
- (五)権現—羽黒権現のこと。延喜式神名帳に、田河郡伊波神社とあり。國幣小社、草創極めて古し。
- (六)延喜式—醍醐帝の延長五年藤原忠平撰、五十卷、朝廷の公事百官の作法等を記す。

○挿圖—最上川下り (龜頭奥の細道所載)



奥の細道

水上とす。ごてん、はやぶさなど云おそろしき難所有。板敷山の北を流て、果は酒田の海に入。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。是に稻つみたるをやいな船といふならし。白糸の瀧は、青葉の隙に落ちて、仙人掌岸に臨て立。水みなぎつて舟あやうし。

五月雨をあつめて早し最上川

六月三日、羽黒山に登る。圖司左吉と云者を尋て、別當代會覺阿闍利に謁す。南谷の別院に舍して、憐愍の情こまやかにあるじせらる。

四日、本坊にをゐて俳諧興行。

有難や雪をかほらす南谷
 五日、権現に詣。當山開闢、能除大師はいづれの代の人と云事をしらす。延喜式に、羽州里山の神社と有。書寫黒の字を里山となせるにや。羽州黒山を中略して羽黒山と云にや。出羽といへるも鳥の毛羽を此國の貢に献ると

- (一)月山—月山は三山の中最も高く六千三百五十尺餘、頂上に月山神社あり。月讀命を祀る。三山は連続せる山なり。
- (二)武江東叡—武蔵江戸の東叡山寛永寺。
- (三)天台止觀—止は多くの妄念を制止するをいひ、觀は事理を照見して諸法を識別するをいふ。
- (四)圓頓融通—圓頓は圓滿にして停滯なきこと、融通は諸法を觀ずるに滯らざることをいふ。
- (五)龍泉—史記荀卿傳註晉太康地理記云。汝南西平縣有龍泉水、可引用。泮刀劍とあり。
- (六)干將莫耶—昔支那名劍の名。もと干將は刀工の名、莫耶は其の妻。二刀成るに及んで其名を以て名づく。吳越春秋に詳し。
- (七)炎天の梅花—福林句集に「炎天梅葉簡齋詩の句あるに由る。蓋し支那の南方炎天に梅花の咲く事もありしならん。
- (八)行尊僧正—小一條院の御子、參詣基平の子也。鳥羽院管絃の御遊の時、花岡左大臣の琵琶の緒のきれたるに、懷より出して奉りしこと十訓抄に見ゆ。
- (九)歌—金葉集雜上に「大峰にておもひもかけず、櫻の花のさきたりけるを見てよめる。諸ともにあはれと思へ山櫻花より外にしる人もなし」

風土記に侍とやらん。月山湯殿を合て三山とす。當寺武江東叡に屬して、天台止觀の月明らかに、圓頓融通の法の灯か、げそひて、僧坊棟をならべ、修驗行法を勵し、靈山靈地の驗効、人貴且恐る。繁榮長に於て度御山と謂つべし。八日月山にのぼる。木綿しめ身に引かけ、寶冠に頭を包、強力と云ものに道びかれて、雲霧山氣の中に氷雪を踏てのぼる事八里、更に日月行道の雲關に入かとあやしまれ、息絶身こゝえて、頂上に臻れば、日没て月顯る。笹を舖、篠を枕として、臥て明るを待。日出て雲消れば湯殿に下る。

谷の傍に鍛冶小屋と云有。此國の鍛冶靈水を撰て、爰に潔齋して劔を打終、月山と銘を切て、世に賞せらる。彼龍泉に劔を淬とかや。干將莫耶のむかしをし。たふ。道に堪能の執あさからぬ事しられたり。岩に腰かけてしばしやすらふほど、三尺ばかりなる櫻の、つぼみ半ばひらけるあり。ふり積雪の下に埋て、春を忘れぬ遅さくらの花の心わりなし。炎天の梅花爰にかほるがごとし。行尊僧正の哥の哀も爰に思ひ出で、猶まさりて覺ゆ。惣而此山中の微細、行者の法式として他言する事を禁ず。仍て筆をとめて記さず。坊に歸れば、阿闍梨の需

- (一)長山氏—酒井家の家臣、重行と號す。
- (二)俳諧—表六句は左の如し
珍しや山を出羽の初茄子
芭蕉
蟬に車の音添ふる井戸
重行
紺織の暮忙しう校打つて
會良
團彌生のすゑの三日月
呂丸
吾顔に散かゝりたる梨の花
行
銘に胡蝶と付けし盃
蕉
(三)淵庵不玉—酒田の醫師、伊東玄順のこと。淵庵は號、不玉は俳名。
- (四)あつみ山—鶴岡市の西南、國境に近くそびゆる山。
- (五)吹浦—象潟と酒田の間の海岸にあり。
- (六)鳥海の山—海拔七千三百餘尺、象潟の東南に聳ゆ。秋田富士の名あり。
- (七)莫作—摸索の當字なるべし。
- (八)雨もまた奇也とせば—蘇軾の「飲湖上初晴後雨二首」の詩に「水光瀲灩晴偏好。山色空濛雨亦奇」の句あるによれり。

に依て三山順禮の句短冊に書。

涼しさやほの三か月の羽黒山
雲の峯幾つ崩て月の山
語られぬ湯殿にぬらす袂かな
湯殿山錢ふむ道の泪かな 會良
羽黒を立て、鶴が岡の城下、長山氏重行と云物のふの家にむかへられて、誹諧一卷有。左吉も共に送りぬ。川舟に乗て酒田の湊に下る。淵庵不玉と云醫師の許を宿とす。

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ
暑き日を海にいたり最上川
江山水陸の風光數を盡して、今、象潟に方寸を責。酒田の湊より、東北の方、山を越、磯を傳ひ、いさごをふみて、其際十里、日影や、かたぶく比、汐風眞砂を吹上、雨朦朧として鳥海の山かくる。關中に莫作して、雨も又奇也とせば雨後の晴色又頼母敷と、蟹の筈屋に膝をいれて、雨の晴を待。其朝天能齋て朝

(一)象潟—元祿九年、桃隣の記事によれば「小島の數七十八、東鳥海山、西、荒海。町の末、板橋の下、晝夜汐のさしひきありて、満干毎に潟の姿異なるあり云々」とあり。よりに芭蕉の當時のさき想像せらる。

○挿圖—象潟地方地圖

(二)能因嶋に舟よせて云々—この島は象潟名所の一。能因の歌「世の中はかくてもへけり象潟のあまのたまやを我宿にして」後拾遺集

(三)花の上こぐ—「きさがたの櫻は波にうづもれて花の上こぐあまのつり舟」西行の歌と傳ふ。

(四)干満珠寺—今の蚌滿寺、曹洞宗。

(五)むや—の關—有耶無耶の關立石寺の東南、國境にありし關。こゝにいふは、象潟の南、小砂川と汐越との間の海濱にありし關「菅菰」をさすならん。

(六)西施—拾遺記に「西施、越女所謂西子也。有絶世之美。越王勾踐、獻之吳王夫差。夫差嬖之、卒至傾國。」



日花やかにさし出る程に、象潟に舟をうかぶ。先能因嶋に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、むかふの岸に舟をあがれば、花の上こぐとよまれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。江上に御陵あり。神功后宮の御墓と云。寺を干満珠寺と云。此

處に行幸ありし事いまだ聞ず。いかなる事にや。此寺の方丈に座して簾を捲ば、風景一眼の中に盡て、南に鳥海天をさへえ、其陰うつりて江にあり。西はむやの關路をかぎり、東に堤を築て、秋田にかよふ道遙に、海北にかまえて浪打入る所を汐ごとと云。江の縦横一里ばかり、佛松嶋にかよひて又異なり。松嶋は笑ふが如く、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはえて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

祭禮

象潟や料理何くふ神祭會良

蟹の家や戸板を敷て夕涼みの、國の商人低耳

岩上に雌鳩の巢をみる

波こえぬ契ありてやみさごの巢會良

酒田の余波、日を重て北陸道の雲に望。遙々のおもひ胸をいたまして、加賀の府まで百卅里と聞。鼠の關をこゆれば、越後の地に歩行を改て、越中の國一ぶりの關に到る。此間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天河

今日は、親しらず、子しらず、犬もどり、駒返しなど云北國一の難所を越てつかれ侍れば、枕引よせて寐たるに、一間隔て西の方に、若き女の聲二人斗とき

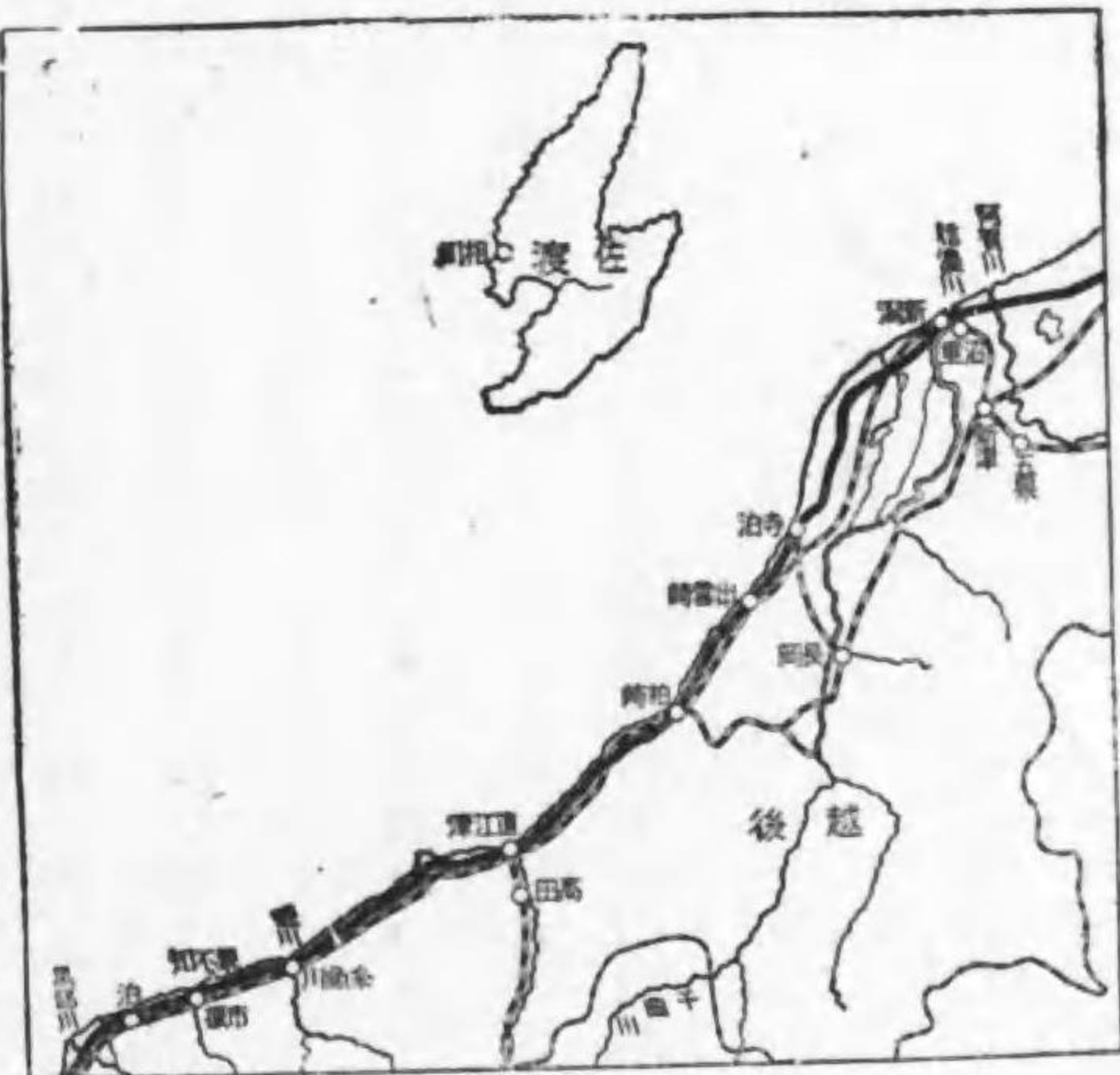
奥の細道

(一)鼠の關—念珠關。羽前と越後の境なる海岸にありし關。

(二)一ぶりの關—今の市振村。越中越後の國境、海岸にありし關所。

(三)親しらず犬もどり—親しらず犬もどり駒返しみな市振の東海岸にある難所。

こゆ。年老たるおのこの聲も交て物語するをきけば、越後の國新瀉と云所の遊女成し。伊勢參宮すると此關までおのこの送りて、あすは古郷にかへす文したゝめて、はかなき言傳などしやる也。白浪のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世をあさましう下りて、定めなき契、日よの業因いかにつたなしと物云をさゝく寝入て、あした旅立に、我く



(一)くろべー黒部は立山連峰と信州アルプス諸峰との間を流る、事廿四里、越中の東部の海に入る。川口數多の流れに分れたる故に四十八ヶ瀬といへり。

(二)那古—今の新瀉のこと。歌枕、萬葉集卷十八、田邊史福麿の歌「奈吳の海に船暫し借せ沖に出て、波立ち來やと見て歸り來む」等の歌あり。

(三)擔籠の藤浪—今の宮田村、水見町の南一里の海岸にあり。萬葉集卷十九に「十二日、布勢水海に遊覽し、船を多帖の灣に泊めて、藤花を望み見て各懷を述べて作れる歌」四首あり。

(四)有磯海—伏木港の西北一里の海岸。こゝにては固有名詞。

(五)卯の花山、くりから谷—俱利伽羅谷は有名なる古戰場、加賀の國境磯波山にあり。卯の花山は俱利伽羅峠の南にあり。

(六)何處—伊勢の人、享保十六年歿。

(七)一笑—小杉氏、茶屋新七。初め梅盛につき後蕉門に入る。金澤の人。

哀さしばらくやまざりけらし。

一家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれば書とゞめ侍る。くろべ四十八ヶ瀬とかや。數しらぬ川をわたりて、那古と云浦に出。擔籠の藤浪は、春ならずとも、初秋の哀とふべきものと人に尋れば、是より五里いそ傳ひして、むかふの山陰にいたり、蟹の苦ふきかすかなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじといひをどされてかゝの國に入。

わけの香や分入右は有磯海

卯の花山、くりから谷をこえて、金澤は七月中の五日也。爰に大坂よりかよふ商人何處と云者有。それが旅宿をとみにす。

一笑と云ものは、此道にすける名のほのく聞えて、世に知人も侍しに、去年の冬早世したりとて其兄追善を催すに

塚も動け我泣聲は秋の風

ある草庵にいざなはれて
秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中噺

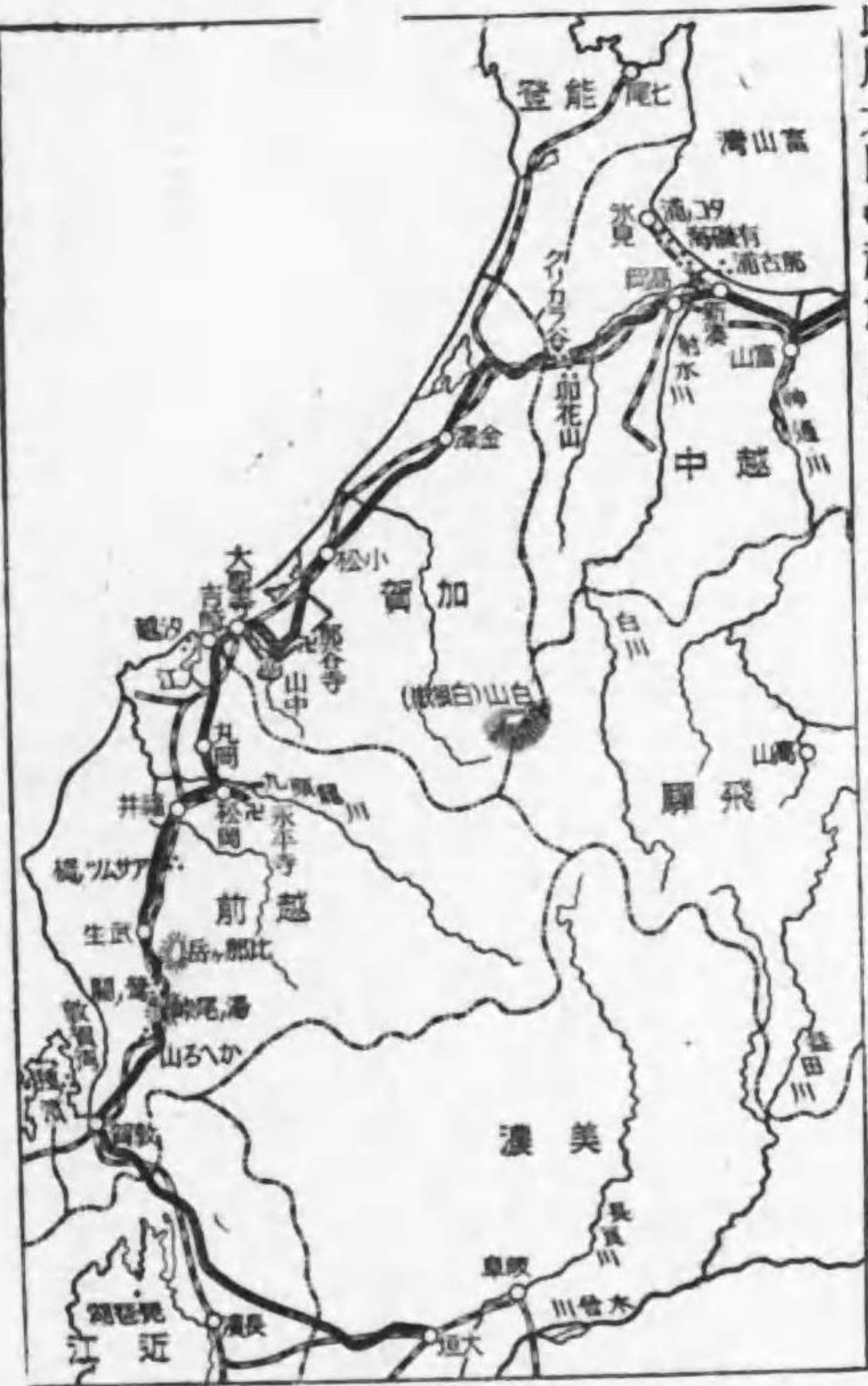
(一)小松—金澤市の西南十里餘、今の小松町、安宅關址こゝに近し。

(二)太田神社—多田八幡宮といふ小松町字上本折町にあり。延喜式にも出てたる舊社。縣社。祭神は衝棒等乎而留比古命。木曾義仲この社に奉養し、實盛戰死するに及び、其の兜、錦の直垂等を納む。

(三)眞盛—齋藤別當實盛のこと。

あか〜と日は難面もあきの風
小松と云所にて
しほらしき名や小松吹萩すゝき

此所太田の神社に詣。眞盛が甲錦の切あり。往昔源氏に属せし時、義朝公より



給はらせ給とかや。げにも平土のものにあらず。目庇より吹返しまで、菊から草のほりもの、金をちりばめ龍頭に鍔形打

(一)樋口次郎—義仲の重臣、次郎發光。

(二)山中の湯—今の山中温泉。

(三)白根が嶽—加賀白山のこと。加賀飛騨の國境に聳えて海拔八千九百餘尺、古歌に多くよまれたり。

(四)那谷—那谷寺。山中温泉の東方、千手觀音を祀る。紅葉の名所。花山法皇寛和年間こゝに巡錫し給ひ那谷と名づけ給ふ。

(五)那智、谷組—那智は紀伊國那智山、西國三十三箇所。一番の札所。谷組は谷汲、美濃國谷汲觀世音、西國第三十三番の札所なり。

(六)有明—有馬の誤なるべし。

(七)山中や—菊の水をのみて命をのべたる事、風俗通にも見え、東鑑、太平記などにも記されたり。南陽縣菊水のご事。

(八)久米之助—桃妖のこと。泉屋又兵衛の子、桃支齋と號す。芭蕉門。加賀の人。

(九)貞室—安原氏名は正章、花の本二世と稱す。貞徳門、京都人。

(一〇)風雅に辱められて—許六の歴代滑稽傳に泉屋又兵衛にはづかしめられし事をするせり。

たり。眞盛討死の後、木曾義仲願狀にそへて、此社にこめられ侍よし、樋口の次郎が使せし事共、まのあたり縁記にみえたり。

ひざんやな甲の下のきり〜す

山中の温泉に行ほど、白根が嶽後にみなしてあゆむ。左の山際に觀音堂あり。花山の法皇三十三所の順禮とげさせ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひて、那谷と名付給ふとや。那智谷組の二字をわかち侍しとぞ。奇石さま〜に、古松植ならべて、萱ぶきの小堂岩の上に造りかけて、殊勝の土地也。

石山の石より白し秋の風

温泉に浴す。其功有明に次と云

山中や菊はたおらぬ湯の匂

あるじとする物は、久米之助とていまだ小童也。かれが父、誹諧を好み、洛の貞室若輩のむかし、爰に來りし比、風雅に辱められて、洛に歸て貞徳の門人となつて、世にしらる。功名後、此一村判詞の料を請ずと云。今更むかし語とはなりぬ。

- (一)長島—桑名町の北、長島村。
- (二)雙鳧—雙鳧の誤。前漢書、蘇武別李陵詩に「雙鳧俱北飛。一鳧獨南翔。子當留斯館。我當歸故鄉。」の句によれり。
- (三)大聖持—大聖寺町のこと。
- (四)全昌寺—禪宗の一小寺。

- (五)吉崎の入江—吉崎は大聖寺の西南二里の地。入江は吉崎ののぞめる北潟のこと。
- (六)汐越の松—菅菰抄に「吉崎の里の西はすべて入江にて、北を竹の浦といひ、南を蓮が浦といふ。皆名所也。(中略)吉崎の入江に渡船あり(濱坂のわたしと云)此江を西に渡りて濱坂村に至る。それより汐越村を越え、砂山をこえ、五六町ゆけば高き丘あり。上平らかにして廣く古松多し。其下は外海の荒磯にて、岩間々々にも亦松樹あり。枝葉愛すべし。此邊の松をなべて汐越の松といふ。」

曾良は腹を病で、伊勢の國長嶋と云所にゆかりあれば先立て行に、
 行く／＼てたふれ伏とも萩の原 曾良
 と書置たり。行ものゝ悲しみ、残ものゝうらみ、雙鳧のわかれて雲にまよふがごとし。予も又、

今日よりや書付消さん笠の露

大聖持の城外全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地也。曾良も前の夜此寺に泊て、

終宵秋風聞やうらの山

と残す。一夜の隔千里に同じ。吾も秋風を聞て衆寮に臥ば、明ぼのゝ空近う、讀經聲すむまゝに、鐘板鳴て食堂に入。けふは越前の國へと、心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども紙硯をかゝえ階のもとまで追來る。折節庭中の柳散れば、庭掃て出るや寺に散柳

とりあへぬさまして、草鞋ながら書捨つ。越前の境、吉崎の入江を舟に掉して、汐越の松を尋ぬ。

- (一)終夜—この歌、菅菰抄に「山家集、家集、その外の歌集になし。因て旁々尋侍るに運如上人の詠歌なるよし彼宗の徒皆言へり」とあり。
- (二)一辨—一辯。
- (三)無用の指を立つ—莊子、駢拇篇に「枝於手者、樹無用之指也」の句による。
- (四)丸岡天龍寺—松岡天龍寺のこととなるべし。天龍寺は禪寺。
- (五)北枝—立花次郎右衛門。金澤の研師、初めト枝と號せり。芭蕉の門人。
- (六)永平寺—僧道元の開山、曹洞宗の大本山。
- (七)道元禪師—曹洞宗を傳へたる最初の人、貞應二年入宗、天童如淨禪師に學ぶ。寛元元年永平寺の開祖となる。
- (八)邦機—邦機。
- (九)等裁—連歌師。櫻井元輔の弟子。等裁は連歌の名、併名は筋景。

終宵風に波をはこばせて
 月をたれたる汐越の松 西行
 此一首にて數景盡たり。もし一辨を加るものは無用の指を立るかごとし。丸岡天龍寺の長老、古き因あれば尋ぬ。又金澤の北枝といふもの、かりそめに見送りて此處までしたひ來る。所々の風景過さず思ひつゞけて、折節あはれなる作意など聞ゆ。今既別に望みて、

物書て扇引さく余波哉

五十丁山に入て永平寺を禮す。道元禪師の御寺也。邦機千里を避て、かゝる山陰に跡をのこし給ふも、貴きゆへ有とかや。

福井は三里計なれば、夕飯したゝめて出るに、たそがれの路たどくし。爰に等裁と云古き隠士有。いづれの年にか、江戸に來りて予を尋。遙十とせ餘り也。いかに老さらばひて有



奥の細路

- (一) 白根が嶽—白山。
- (二) 比那が嵩—日野山ともいふ。武生町の東南。日野大権現社あり。
- (三) あさむつの橋—福井の南、淺水にある橋。枕草紙に「橋はあさむつの橋、長柄の橋」とかけられるなり。
- (四) 玉江の蘆—「福井の町を上の方へ出はなれ二町許り行けば赤坂といふ所あり。是を過て石橋三つあり。その中の橋の高欄として此川を古の玉江なりと云ふ。菅菰抄)後拾遺集—夏刈の玉江の立蘆をふみしだき群れる鳥の立つ空ぞなき。」
- (五) 鶯の關—關の原といふ名所。湯ノ尾と鯖波との間にあり。
- (六) 燧が城—湯尾村にありし城。壽永の頃義仲の陣せし地。
- (七) かへる山—「かへる村の上の山をいふ」と菅菰にあり。かへる村は鹿森村也。
- (八) けいの明神—氣比の明神。仲哀天皇、行宮の蹟にて、祭神は仲哀天皇。日本武尊、神功皇后、應神天皇。當國の一の宮。
- (九) 遊行二世の上人—時宗の開祖。一過上人を一世として他阿上人を二世とす。この宗旨は諸國の遊行をつとむ。この宗旨は諸國の間を住職とし、本山上人を隱居とす。

にや、將死けるにやと人に尋侍れば、いまだ存命してそこくと教ゆ。市中ひそかに引入て、あやしの小家に夕良へちまのはえかゝりて、鶏頭は、木々に戸ぼそをかくす。さては此うちにこそと門を叩ば、佗しげなる女の出で、いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや。あるじは、此あたりの何がしと云ものゝ方に、行ぬ。もし用あらば尋給へといふ。かれが妻なるべしとしらる。むかし物がたりにこそかゝる風情は侍れと、やがて尋ねあひて、その家に二夜とまりて、名月はつるがのみなとにとたび立。等裁も共に送らんと、裾をかしうからけて、路の枝折とうかれ立。漸白根が嶽かくれて、比那が嵩あらはる。あさむつの橋をわたりて、玉江の蘆は穂に出にけり。鶯の關を過て、湯尾峠を越れば、燧が城かへるやまに初鴈を聞て、十四日の夕ぐれ、つるがの津に宿をもとむ。その夜月殊晴たり。あすの夜もかくあるべきにやといへば、越路の習ひ猶明夜の陰晴はかりがたしとあるじに酒すゝめられて、けいの明神に夜參す。仲哀天皇の御廟也。社頭神さびて、松の木の間にもれ入たる、おまへの白砂霜を敷るがごとし。往昔、遊行二世の上人、大願發起の事ありて、みづから草を刈、土

(一) ますほの小貝拾はんと種の濱に舟を走す—山家集「しほ染むるますほのこがひ拾ふとて色の濱とやいふにやあるらむ。」

- (二) 法花寺—寺名。日蓮宗。
- (三) 露通—忌部氏、美濃人、芭蕉の門人。零落の身を芭蕉に救はれたりといふ。
- (四) 越人—越智氏、越後の人、名古屋に住す。芭蕉の門人。長生して芭蕉の三十三回忌を執行せり。
- (五) 如行—近藤氏、美濃大垣の藩士。寶永年間に歿す。

石を荷ひ泥濘をかはかせて、參詣往來の煩なし。古例今にたえず。神前に眞砂を荷ひ給ふ。これを遊行の砂持と申侍ると亭主のかたりける。

月清し遊行のもてる砂の上

十五日、亭主の詞にたかはず雨降。

名月や北國日和定なき

十六日、空霽たれば、ますほの小貝ひろはんと、種の濱に舟を走す。海上七里あり。天屋何某と云もの、破籠小竹筒などこまやかにしたゝめさせ、僕あまた舟にとりのせて、追風時の間に吹着ぬ。濱はわづかなる海士の小家にて、佗しき法花寺あり。爰に茶を飲、酒をあたくめて、夕ぐれのさびしさ感に堪たり。

寂しさや須磨にかちたる濱の秋

浪の間や小貝にまじる萩の塵

其日のあらまし、等裁に筆をとらせて寺に残す。

露通も、此みなとまで出むかひて、みのゝ國へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入ば、曾良も伊勢より來り合、越人も馬をとばせて如行か家に入集る。

- (一)前川子—津田氏、美濃大垣の人、松軒とも號す。
- (二)荊口父子—共到大垣の人、宮崎氏。貞享行脚の時、如行と共に蕉門に入れり。
- (三)伊勢遷宮—伊勢大神宮は廿一年目毎に遷宮す。この時は内宮は長月十日、外宮は同じく十三日なりき。
- (四)素龍—江戸淺草自性院住職、全故と號す。芭蕉の知己にして和歌、書に勘能なり。元祿十二年寂す。
- (五)行成紙—淡藍色、黄色等に染め、雲母にて細紋を型置にしたる薄き烏子紙、藤原行成の筆なる歌書の料紙に摸擬したるもの。而して本文の原本は黄色の行成紙なり。
- (六)去來—向井氏、蕉門屈指の俳人。京都に住し、落柿舎の主なり。寶永元年歿す。
- (七)野坡—志多氏、越前福井の人。芭蕉の門人、元文五年歿す。

前川子、荊口父子、其外したしき人と日夜とぶらひて蘇生のものにあふがごとく、且悦び且いたはる。旅の物うさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮おがまんと、又舟にのりて、

始の

ふたみに

わかれ行秋ぞ

此一書は芭蕉翁奥羽の紀行にして素龍が筆也書の縦五寸五歩横四寸七歩紙の重五十三首尾に白紙を加ふ外に素龍が跋有^{今略}之。行成紙の表紙紫の糸外題は金の真砂ちらしたる白地におくのほそ道と自筆に書て隨身し給ふ遷化の後門人去來が許^六に有又真蹟の書門人野坡の許^七に有草稿の書故文章所と相違す今去來が本を以て摸寫する者也。

京寺町二條上ル町

井筒屋庄兵衛板

奥の細道終

昭和五年三月二十三日印刷
昭和五年三月二十八日發行

奥の細道

定價金參拾錢

不許複製

編者	藤村作
發行者	東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地 佐藤正叟
印刷者	東京市京橋區銀座西二丁目三番地 高橋郁

(三島印刷株式會社印刷)

發行所

東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地
振替口座東京二九五〇七番

至文堂

電話青山 四三五四六番
四三三四三番

東京帝國大學教授 文學博士 藤村作先生編

高等學校國文教科書

本抄	本抄	古	萬	古	新	清	平	徒	俳	源	大
胸	日	事	葉	今	古	少	家	然	文	氏	
算	本	集	集	和	今	納	物	物	學	物	
用	永	記	集	歌	和	言	集	草	集	鏡	
藏	代	上	集	集	歌	枕	子	集	集		
	藏	下	集	集	集	草	集	集	集		
五	五	卷	新	新	三	三	三	三	三	近	近
版	版	刊	刊	刊	版	版	版	版	版	刊	刊
定價金八拾錢	定價金七拾錢	定價各金一圓八十錢	定價金參圓	定價金貳圓	定價金貳圓	定價金貳圓	定價金貳圓	定價金貳圓	定價金貳圓	定價金貳圓	定價金貳圓

最新刊
古今和歌集
定價金貳圓
送料金八錢

東京帝國大學教授 文學博士 藤村作先生編

古今集は歌の王國平安朝に於ける一大歌集であることはいふまでもなく、その後の日本文學は殆どその影響を蒙らないものはない。古今集を見ずして平安朝の歌を知ることは出来ず、古今集を知らずして如何なる日本文學の註釋書も十分に理解することが出来ないであらう。この古今集に就て正しき知識を得る前提として先づ正しき古今集を知る必要がある。

現代最も廣く流布せられてゐる古今集は八代集に收められた定家の貞應本である。併しこの貞應本に善き古寫本のあることを知る者は流布本に就き疑惑を挿まずには居られない。その上同じ定家本であつても傳來の異なる嘉祿本との關係、更に定家本と清輔本との異同、最近有名になつた元永本及び同系統に立つ筋切と定家との異同如何などの問題は大きいに研究を要する所である。

本書は以上の問題を前提として編纂せられたもので、貞應本の中最も古き寫本と考へられた頼阿自筆本(宮内省圖書寮所藏)を底本とし、貞應本と姉妹關係にある嘉祿本(東京帝國大學所藏)、定家本に先行する俊成本の系統と考へられる傳爲家筆本(靜嘉堂文庫所藏)、定家本と從兄弟の關係にある清輔本二本(靜嘉堂文庫所藏)などを以て校合し、更にこれらの諸本に對して異本の位置に立つと考へられる元永本、傳佐理筆の筋切、傳成筆切、傳俊賴筆の序、傳貫之筆の高野切などをも參照し、各本の間における語句の異同は勿論、歌首の増減なども一々明瞭に指摘した。且つ本書には適當なる頭註を試み特に古今集中必讀の歌二百首に印を附した。本書は實に以上に擧げた諸書を一系の下に集大成したものであつて一般の愛好者に對しては勿論特殊研究者にとつても至極簡便で有益な編著であり、更に高等諸學校の教科書としても最適のものである。

最新刊
新古今和歌集
定價 金貳圓
送料 金八錢

東京帝國大學教授 文學博士 藤村作先生編

古く和歌の調の特異なるものを擧げて、萬葉・古今・新古今の三つを説いてゐる。この三者は和歌觀に或る固定したもの存した時代、換言すれば、自らの言葉もて自らの詩境を歌へと説いた近世の和歌觀に至るまでは、多少とも常に對立的に思惟されてゐた。この内、萬葉古今の二集に對しては古來許多の研究や註釋を有するけれども、新古今集に就いては其等の存するもの少く、また流布本にもとづく從來の研究は主として辭句の末に止まり、定家の明月記や、家長日記に示された撰者等の異常な努力による勞作であることを、本文に就いて研究し得ることが少なかつた。然るに流布本とは異なる隱岐本の出現は、この新古今集の根本的な研究の上に、新なる光明を放つたものである。

本書は、この隱岐本の一であつて、宮内省圖書寮所藏にかかる烏丸光榮自筆寫本を底本とし、次のやうな點に注意して編まれたものである。

一、烏丸本は其の奥書によると定家自筆本、家隆自筆本を參校した古傳本の寫本であつて、其考異その他の點に、研究上極めて貴重なものが存してゐる。本書は其をそのまゝ採記した。従つて、所謂「新古今切つき」のあとを如實に見ることも出来るやうになつた。

一、集所載の歌で、萬葉集、古い歌物語、家集、歌合等に出でたるものは、一一これを原本と對校し、其旨を頭註に記した。これは新古今集成立についての研究上に、相當の手がかりともならうと思ふ。

一、頭註には本歌、引歌を主として記した。また流布本との相違點をも、こゝに示した。

最近、三矢・武田・折口の三氏によつて隱岐本新古今和歌集の出版があつて本集に關する研究が新しく擡頭して來た時にあたり、底本を異にした本書の出づることも意義あることであらう。

東京帝國大學教授 文學博士 藤村作先生編

最新刊 清少納言枕草子

定價 金貳圓
送料 金八錢

清少納言の枕草子は、源氏物語と並び稱せらるゝ國文學史上の大作である。しかるにこれが傳本として從來一般に流布した春曙抄系統本は字句章段の錯簡誤脱少からず、本文解釋上甚だ遺憾の點が多かつたが、今回藤村文學博士によつて、枕草子諸本中最も正確なる本文を有する内閣文庫所蔵の三卷古寫本が、他の諸本との嚴密なる校合を経て、世に現れる事になつたのは、學界のため誠に慶賀すべきである。

(一)本書は貴重なる寫本の本文を一々正確細密に比較校合し、その異同を列擧して明示した。

(二)本書は從來の誤れる註釋を破り、最も新しく最も正しく、かつ最も精細なる解釋をその頭に加へた。ことに本文校定によつて、前人未言の新説を示し得た。

(三)本書は有職、故實、家風、宮殿、調度、服裝等に亘りて圖解し、全卷を一大譜圖たらしめた。

本書の原本たる三卷本枕草子は、枝直、千蔭、弘賢、高尚、春村等をはじめ、近世諸家の等しく秘して傳寫校合した貴重なる傳本である。敢て諸家の精讀をまつ。

東京帝國大學國文學研究室編輯

清少納言枕草子研究

定價 金壹圓
送料 金參錢

一 清少納言枕草子研究の歴史的考察

善及愚翁校勘本及び鎌倉古寫本に於ける異本研究

細川幽齋、宮本孝庸、岡西惟中等の異本研究

姉小路齋繼、清原枝賢等の異本研究

枕草子抄と春曙抄との異本研究

季吟以後諸家の異本研究

二 清少納言枕草子の現存異本解説

古版本の性質と系統とその諸傳本

三卷本の性質と系統とその諸傳本

堺本、宸翰本の系統とその諸傳本

抄出本の系統とその諸傳本

三 清少納言枕草子の逸文と關係書目

四 清少納言枕草子の成立及び錯簡に關する假説

東京帝國大學助教授 久松潜一先生著

最新刊 上代日本文學の研究

定價 金參圓五拾錢
送料 金拾四錢

本書は著者が過去十年間に亘り主として古代文學に關する研究論文を集めたもので、題材は廣く上代中古近世の各文學に取り蘊蓄を傾けて、その精神内容及び形態等に就て論究したものである。

先づ「國文學を流れる三の精神」に於ては古代文學の精神としてまこと、もののははれ、幽玄を擧げその意義並に展開を辿り、その他古事記の統一性としての國家的精神を明かにし、長歌・旋頭歌の形態の本質を定め、又堤中納言物語や狹衣物語を考察し藤原定家を中心として古代和歌の内容や形態を觀察する等、從來比較的閑却せられた古代國文學上の問題を中心として新解釋を與へんと試みた。

更に古代文學の研究史上に於ける特殊の問題を捉へ考證を試みた。契沖と春滿との學說上の影響關係のあることを斷定し、從來春滿の著書と信ぜられてゐた萬葉童蒙抄は實は春滿の弟信名の著なることを明かにし、或は契沖の弟子野田忠肅の歿年を考證し、高野山に藏する折負輯によつて微雲軒の傳を明かにし、刈谷文庫を探つて村上忠順の業績を明かにしたるなど、學界に未知の新事實を提供したものが尠くないのである。

實に本書はこれ等の諸問題に就き著者が深い造詣を以て縦横に論議し、その真相を闡明して前人未言の新説を唱出したのは國文學界に於ける一大收穫である。

東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究叢書第一篇
東京帝國大學助教授 文學士 久松潜一先生著

忽五版 萬葉集の新研究

定價金參圓五拾錢
送料金拾四錢

從來の萬葉研究の多くは殆どその註釋書にとどまつてゐる。本書はこの點にあきたらずして、萬葉集に造詣深い著者が、從來の成説に提はれず、全く自由の高處に立つて深くその内容本質に立ち入り、その考察に何等の拘束をも感ずることなく、専ら批評的態度をとつて根本的に研究した多年の成果を一系列の下に纏めたものである。

- 一 全體として人と作品の間を流れる抒情的精神を見ようとしたこと
- 一 人麿、赤人、憶良、旅人、家持、蟲廣等の萬葉集の主なる歌人やまた女歌人や、民衆歌人を對象として、萬葉集の詩形、神人の思想、古代の傳説、上代生活等の主なる問題を考察する態度をとつたこと
- 一 萬葉集の歴史的意義を見るために、記紀の歌を概観して萬葉集を産出する過程を眺め、萬葉派の歌人を説いて萬葉集の流れを見ようとしたこと
- 一 萬葉集の成立を説き、その研究の發達をも眺めて、基礎的研究にもふれてゐること

本書はこれ等の新見地に立つ前代未言の考説である。實に本書によつて萬葉集の研究は確かに一新生面を開拓したものである。萬葉研究者上代文學に興味を有する人には、ふまでもなく、苟くもこの國民的歌集の眞相を知らんとする人々の爲に無二の伴侶である。

東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究叢書第二篇
第六高等學校教授 文學士 麻生磯次先生著

忽五版 近生活と國文學

定價金參圓五拾錢
送料金拾四錢

從來の特權階級の文學は徳川期に入つて全く一般民衆の手中に渡つた。伸ぶべくして久しく伸び得なかつた鬱鬱たる民衆の氣概は、一度因襲の手より脱するや俄然として自らの生活の樹立に赴いた。かくして止むに止まれぬ民衆の聲は、やがて徳川期の文學を生んだ。本書はこの生々とした實生活の姿態と、その切實に表現せられた文學との交渉を深く内面本質に立ち入つて、如實に見んとしたものである。一全體として文學を生活の表現として考へ、同時に生活の諸相を通して文學的現象の特質を見ようとした

- 一 浮世草紙、浄瑠璃本、洒落本、滑稽本等を展開の姿の下に考へ、これが世相との交渉を見ようとした
- 一 武士と町人生活、遊里生活、俳諧生活、諧謔生活等の諸相を眺めその特質を考へた
- 一 武士と素町人、遊女と地女、行脚僧と遊治郎の對立に時代の特殊な姿を認め義理、人情、粹、通、わび、さび、機知、諷刺等の興味の意を考慮して時代精神の特性を解剖し生活展開の理法を見ようとした

著者は新進學士、その多年の研究によつて複雑多様な徳川文學の中心基調をなす種々相を捉へて前人未踏の境地を開拓し、よく民衆生活の全野を展開してゐる。徳川時代の文學、世相の特質を知らんとする人には無二の伴侶であり、更に現代の生活、當來の文藝に興味を有する人々には多大の暗示を含んでゐる。

目次
第一章 總論 一、平民文學と世相 二、形式と機知 三、施政の要
第二章 武士と町人 一、武士の地位 二、武士の教化 三、町
第三章 遊里中心の生活 一、女性 二、傾城氣質
第四章 俳諧生活の基調 一、俳諧の道 二、蕉風の由來 三、芭蕉の生活 四、俳諧生活 五、寂
第六章 滑稽生活 一、滑稽の性質 二、滑稽生活 三、滑稽の人物と滑稽
第七章 諷刺生活 一、諷刺の性質 二、諷刺生活 三、諷刺の人物と諷刺
第八章 俗生活 一、俗生活の性質 二、俗生活 三、俗生活の人物と俗
第九章 生活の倫安

東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究叢書第三篇
大阪女子専門學校教授 文學士 兒山信一先生著

忽四版 日本詩歌の體系

定價金參圓五拾錢
送料金拾四錢

和歌、俳句、俗曲、民謡などの日本詩歌は國文學史上の花である。そしてこれ等はその量に於て各時代を通じて極めて重要な地位を占めてゐる。實際國文學の研究はその大半をこれ等詩歌の研究に俟つべきものであらう。しかも從來の研究は單なるその部分的研究の外に出でず表面皮相の研究に止つてゐる。本書はこの點に倣らずして著者が多年の蘊蓄を傾倒し日本詩歌の全野に亘り極めて複雑多様な内面本質に立ち入つてこれを組織立て體系つけたものである。

- 一 和歌、連俳より唱歌、俗曲、民謡等に至るまであらゆる種類の詩歌を對象とし、説經、祭文、鉢叩、讚美歌、歌劇などをも一々網羅した。
 - 一 日本詩歌の歴史的開展を跡づけたものではあるが、單なる表面に表はれた歴史的事實よりも寧ろその根柢に横はる存在理由を重んじながらその發展を系統的に敘述した。即ち日本詩歌が如何にして發生し分化したか、又それが如何にして發達興隆し何か故に衰滅萎縮したか、更に將來如何に發展しゆくべきか等の問題を解決しようとした。これによつて日本詩歌の發生、發達、變遷、衰滅の根本理由を闡明した。
 - 一 詩歌そのものに對する正しい理解を有し確實な根據の上に立ち科學的方法によつて整理した。
- 日本詩歌は國民と共に存し國民と共に榮えるものである。本書はその歴史的根據の上に立つて日本詩歌の新生面を開展すると共に更に新しい問題を提唱したものである。日本詩歌の研究者は勿論一般國文學愛好者に絶好の著書であるばかりでなく、苟くも廣く詩歌に思ひを寄せ興味を有する人々には多大の暗示を齎すものである。

東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究叢書第四篇
文學士 手塚昇先生著

忽三版 源氏物語の新研究

定價金參圓參拾錢
送料金拾四錢

源氏物語出て、九百餘年、常に國文學上の一異彩であるばかりでなく全世界に於ける最古の小説の一として、しかもあの時代に人情展開の過程を寫した物語として、その組織に於てその敘述に於てかくまでに完備したものを見たのは、正に世界文壇の一大驚異である。吾々は祖先の中にかゝる偉大な文學を有することを誇とし又心強く思ふものである。かくして源氏物語一度出て國文學の主流は全くその跡を追つて展開したとも見られる。されば源氏物語の研究は古くより行はれ現に年々殆ど大同小異の註釋書が續々刊行されてゐるのであるが、何れも先人の舊説を繼承墨守したるものみにて、その評論考證に關する總論的方面の研究に至つては見るべきものが甚だ少ない。著者は新進學士、こゝに見る所あり多年研究の結果遂に本書をなすに至つた。實に本書は過去五百年の源氏物語に關する評論考證の研究史を背景とし、而も創作に志す著者が當然の歸結として作家的見地より深く原作者の創作心理に立ち入つて研究評論したもので、過去の成説に提はれず幾多新説を出した源氏物語研究史の最新線に立つものである。

東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究叢書第五編
姫路高等學校教授 文學士 片岡良一先生著

忽三版 井原西鶴

定價金參圓五拾錢
送料 拾四錢

今若し元祿時代を知らうと思ふならば先づ西鶴の描いた所を見るがよい。實に西鶴は元祿時代の先頭に立つて、これを最も明白に最も大膽に、最も具體的に最も鋭く描いてゐるので、此の時代の生活の實際と趣味の根柢とを遺憾なく寫してゐる。一日に二萬三千五百句の放れ業に世人を驚倒せしめたのも西鶴である。一代の文人と俗流者より等しく讃仰の言葉を博したのも西鶴である。こゝに西鶴のはかり知られぬ偉大さと複雑さがある。本書は西鶴の此の偉大さと複雑さとの全面容を見盡さうと企てた。即ち人、俳諧、浮世草子、淨瑠璃などを始め其の他一切の餘技を通じて西鶴の稟質のあらゆる断面に觸れようとしたものである。西鶴の本體を見究めようとするには、内から其の心境の推移や創作心理に深い探りを入れると共に、外から元祿の時代思潮と時代生活とに觸れる必要がある。そこで時代的環境を明瞭にすることによつて、西鶴の相を鮮明に浮び上らせようとした。かくて著者の犀利なる觀察と多年の研究との結果は、本書に於て明かに西鶴の全面を蘇生せしめた觀がある。

東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究叢書第六編
東洋大學教授 文學士 湯池孝先生著

最新刊 樋口一葉論

定價金參圓五拾錢
送料 拾四錢

從來の觀念小説に嫌らずして新に心理描寫主觀描寫の旗幟を擁して佳作連出盛名を一時に惹いたのは樋口一葉である。一葉の文壇に於ける活動は明治二十五年より其二十五歳にして病没するまで僅に四年。其間作る處二十數篇。本書は此等不朽の名作を通して一葉の全面容を知らんとするものである。

一、歸納的態度によつて各方面からの探求。綜合し一葉文學の輪廓と内容とを新に組織立てることに論斷の主意を置いた。

一、一葉文學の背景をなした時代の趨勢特に寫實の風潮並に其次期への推移に留意し明治文學の中樞と一葉の過度期的文學との交渉を明かにしようとした。

一、努めて創作の心理に立入り其實生活から作品への過程消息を明かにしようとした。

一、一葉文學の史的價值を闡明すると共に其文學的價值を探り味の文學たることを強調した。

明治文壇に天才一葉を出したことは吾等の誇である。而も一葉に就て見るべき研究の深いのは吾等の大なる恥辱である。著者は新文學に就て造詣深い篤學の士、殊に一葉を研究すること多年。本書は實に著者が苦心の結果を世に問はんとするもので、當時の文學界の雰囲気並に水準を十分に考察して傳統的先入見を脱し一葉の眞面目を生かしてゐる。

東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究叢書第七編
東京帝國大學國文學研究室 文學士 池田龜鑑先生著

最新刊 宮廷女流日記文學

價金參圓五拾錢
送料 拾四錢

王朝時代に於ける幾多の閑秀作家の筆になつた日記文學は國文學史上に於て特異の地位を占有するものであり同時に又独自の文學世界を展開して極めて藝術的價值の高いものである。而も此等に對する研究考察は從來全く闕却せられてゐたのである。本書は茲に見る所あり、此の内觀的乃至哲學的ともいふべき一系列の文藝を主題として正當なる文學的地位を要求し時期澄徹なる批判及び鑑賞を試みて、その眞意義を闡明したのである。

一、本書は著者が過去六年間各地を歴遊し各種の文庫及び諸家に秘藏せらるゝ門外不出の珍籍を渉獵し諸種の異本を精密に比較校合して本文を制定し古註を検討し前人未言の新解を施し精細なる索引を作り「宮廷女流日記考」無慮一萬八千枚の原稿を整理し此の驚くべき基礎的作業の上に漸く完成したる批評的鑑賞的考察である。

二、本書は日記文學及びその作者を歴史的に説明せんとするよりも寧ろ人間的に解剖分析したものである。従つて王朝女性の模寫的姿態を外面的に解剖分析したものでなくてその間に現はれたる久遠の女性の輝かしき不朽の光彩を直に觀視したものである。

著者は新進篤學の士最近東大國文學科が生んだ秀才である。現時の國文學界に於ける混濁枯渴せる詮索的論文に倦らずして近代の理知と抒情詩的熱情とを交錯して織り出した美はしい藝術的評論である。實に本書は日記文學の研究としては我が學界に於ける最初の企てであり唯一の業績であつてその透徹せる判斷と明確なる論究と清澄なる鑑賞とは全く他の企及し得ざる所である。

東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究叢書第八編
大西貞治先生著

最新刊 古代純日本思想

定價金參圓五拾錢
送料 拾四錢

本書は古事記並に萬葉集を中心としその他の文獻の助けをかり國初より奈良朝末に至る所謂精神の創造生活時代、國民生活自覺時代、國民生活激動時代に亘り専ら古代日本人の精神生活を對照として純眞な國民思想を研究したものである。即ち古代文藝に見えた純眞な國民思想の本質それが外來の儒佛思想によつて如何に影響せられ訓練せられたか、これが奈良朝に入つて如何なる形質をとつたか、更に儒佛思想が國民思想の上如何なる痕跡を残してゐるか、この間に於ける思想界の狀態はどんなであつたか。かういふ問題を極めて思想的に内面本質的に説明しようとするのが本書の主眼である。

一、古事記を以て古代日本の哲學と觀じたこと。

一、萬葉集を一般思想界の狀態から専ら思想的に觀じたこと。

一、古事記に具現せられた國民生活と萬葉集に表現せられた國民思想とが本質的に脈々味通するものであると觀じたこと。

從來に於て絶えて見なかつたこれ等の新見地に立ちその内容が導くがままに深く内面の精神生活の殿堂に參入し著者自身の限りなき要求に應じて自由に觀じ自由に考へ新に見出した眞實相を具體的に描き出さうとしたのが本書である。古代の國民思想も現在の要求に應じて新に書き替へられなければならぬ筈である。かくして著者は十餘年研鑽の成果を以て世に問はんとするのである。古代思想は本書に於て初て不變の價值と永遠の思想とを得たに於て蘇生したかの觀がある。而も之の進むべき道を暗示してゐる。著者は現時國文學研究に於て嚆矢を創り出して行く力の強さを見出すと共に、國文學研究に於て一新生面を開きその進むべき道を暗示してゐる。著者は現時國文學研究に於て嚆矢を創り出して行く力の強さを見出すと共に、國文學研究に於て一新生面を開きその進むべき道を暗示してゐる。著者は現時國文學研究に於て嚆矢を創り出して行く力の強さを見出すと共に、國文學研究に於て一新生面を開きその進むべき道を暗示してゐる。

東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究叢書第九編
東京女子大學教授 文學士 倉野憲司先生著

最新刊 古事記の新研究

定價金三圓五十錢
送料金拾四錢

古事記は日本上代に於ける最も重要な文獻であつて、日本文學の源泉として、國民思想の搖籃として又古代の國民生活を活寫したものとて、古代の日本を知る殆ど唯一の寶典である。而も從來の古事記研究は多くその註釋の範圍を出てなかつた。本書は、この點に憚らずして深くその内容本質に立入り、全く著者独自の見解によつて根本的に研究論明したものである。

- 一古事記を上代に於ける民族的叙事文學と觀じ、その成立・内容及び形式に亘つて民族的叙事詩の本質的研究を經とし、言語・神話・宗教・人類・考古・土俗・歴史・民族・心理等の各方面よりの科學的研究を綜としたものであること。
- 一古事記研究の發達を眺めてその基礎的研究にも觸れたこと。
- 一古事記の素材をなす神話・傳説及び説話の比較討議を試みたこと。
- 一古事記に具現せられた上代の國民思想及び國民生活を闡明せんとしたること。

本書は以上の新見地に立ち著者が多年の蘊蓄を傾倒して複雑多様な古事記の内容本質に立入つて之を組織立て系統づけたもので、明かに古事記研究に一新生面を開拓したもので、その科學的研究を試みた最初のものである。實に本書に於て古事記の眞意義は始めて闡明せられた觀がある。

東京帝國大學教授 文學博士 藤村作先生著

五版 上方文學と江戸文學

定價金貳圓八拾錢
送料金拾貳錢

徳川期の文學は國文學中の花である。浪華から江戸へ、元祿から文化文政へ、藝術の花は移り移つてとりどりの色を見せた。近松や西鶴や芭蕉や種彦やその他の所謂戯作者達。淨瑠璃や、淨世草子や、俳諧や洒落本などの所謂俗文學、是等の作者と作物とは吾が徳川期の文學を飾るものであり、同時に國文學中に重きをなすものである。

本書は徳川文學の研究に於いて現代の第一人者たる藤村博士が興味ある題目を捉へて元祿江戸の文學を平明に論述したるもの、特權階級の手から民族の手に渡された徳川文學の消息、「粹」と云ひ「通」と稱する當時の町人生活の眞相を知るには絶好の資料である。元祿趣味を愛し、江戸趣味を喜ぶ人の爲めに無二の同伴たることは云ふまでもない。

東京帝國大學國文學研究室編輯

國語國文學本質研究

定價金貳圓五拾錢
送料金四錢

國語の音聲上の特質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
口語文の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
方言の起原	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
假名のつかひ	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
傳説文學の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
長歌の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
日記紀行文の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
歴史物語の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
説話文學の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
古歌の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
軍記物語の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
法語の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
連歌の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
御伽草子の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
浮世草子の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
讀本の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
滑稽本の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
狂歌の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
人情本の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
落語の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
新體詩の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
自然主義文學乃至文學運動の特質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
近世文學の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
浮世草子の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
浄瑠璃の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
歌舞伎の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保
物語の本質	東京帝國大學國文學研究室教授 神保

東京帝國大學國文學研究室編輯

日本精神研究

定價金壹圓五拾錢
送料金貳錢

沖融濟靜の味	奈良女子高師教授 岩城準太郎
祖先神と英雄神	水戸高等學校教授 栗原武一郎
新人文主義に就いて	廣島高師教授 齋藤清衛
日本上代人の精神生活	女子大學教授 倉野憲司
古代日本精神の第一義	大西貞治
大和魂の故郷「まこと」	法政大學教授 小山龍之輔
國家的精神の考察	東京帝國大學教授 久松潜一
西行に就	東北帝國大學教授 土居光知
國學者の憧憬と自覺	西尾實
萬葉集の心	東京帝國大學教授 佐々木信綱
記紀に現れた上代の道德思想	學習院教授 次田潤
日本固有の思想と其研究	東京帝國大學教授文學博士 田中義能
鎌倉時代に於ける文藝復興と國民精神	六高教授 松本彦次郎

東京帝國大學國文學研究室編輯

國文學上の女性

定價金壹圓五拾錢
送料金貳錢

自然人が貞操の道德を生むまで	大 四 貞 治
萬葉集の女性	東京帝國大學助教授 久松 潜一
源語及日記より見たる紫式部	文學士 手塚 昇
軍記中の女性	浦和高等學校教授 沼澤 龍雄
謡曲の女性	女子學習院教授 佐成謙太郎
西鶴の「女」	姫路高等學校教授 片岡 真一
近代生活に於ける女性の地位	岡山高等學校教授 麻生 權次
傾城氣質	岡山高等學校教授 麻生 權次
洒落本に現はれたる遊女	國學院大學教授 山崎 龍
時代歌舞伎の完成期とその女	第一高等學校教授 守 齋 憲治
おさい	東京帝國大學教授 藤 村 作
一葉の作品に現はれたる女性	東洋大學教授 湯 地 幸
國語教授の改善について	東京帝國大學教授 藤 村 作

東京帝國大學國文學研究室編輯

元祿文學

定價金壹圓五拾錢
送料金參錢

元祿時代と文藝復興	東京帝國大學助教授 久松 潜一
元祿文學の背景	第五高等學校教授 田中 辰二
元祿時代の大坂及び大阪人	東京音樂學校教授 水谷 義七郎
近松の音楽上に於ける大集成	東京帝國大學教授 高野 班山
近松が世話物の展開	東京帝國大學教授 藤 村 作
紀海音の世話淨瑠璃	東京帝國大學教授 藤 村 作
人及び藝術家としての西鶴	山形高等學校教授 岡部 美二
西鶴の俳諧	姫路高等學校教授 片岡 真一
西鶴の小説	廣島高等師範學校教授 鈴木 敏也
「貝おほひ」を中心とした芭蕉の俳諧	東北帝國大學助教授 萩原 羅月
芭蕉を中心とした俳諧の氣分内容	東京帝國大學助教授 岡崎 義惠
「田茂睡 茂安がひとり言」にあらざる「茂安がものがたり」	東京帝國大學助教授 岡崎 義惠
坂田藤十郎の寫實劇に對する考察	東京帝國大學助教授 岡崎 義惠

東京帝國大學國文學研究室編輯

源氏物語

定價金貳圓
送料金三錢

黃昏から黎明まで	奈良女高師教授 岩城 準太郎
紫式部の物語の製作上及び本質上の主義	成蹊高校教授 志田 義秀
蕭の性格描寫の解剖とその批判	廣島高師教授 齋藤 清衛
源語時代の思想特に節操觀について	史料編纂局 櫻 井 秀
ものゝまぎれに就いて	早大教授 山口 剛
源氏物語論の考察	東大助教授 久松 潜一
主要人物に關する應説	文學士 手塚 昇
源氏物語に現はれたる物の氣に就いて	東京女子大學教授 石村 貞吉
源氏物語中の引歌	國學院大學教授 鳥野 幸次
源氏物語の語法二箇條	第一高等學校長 杉 村 敏介
雲隱否定説	東京高師教授 野村 八良
源氏物語の英譯	朝鮮大學教授 高木 市之助
源氏物語と謡曲	國學院大學教授 佐成謙太郎
源氏物語に於ける古代註釋及び研究	東京高師教授 藤 藤 也
源氏物語の古寫本その他	東大講師文學博士 佐々木 信綱
源氏物語研究史の新資料	東大助教授 橋本 進吉
源氏物語千鳥抄について	東大助教授 橋本 進吉
古註の集成—岷江入楚	東京高師教授 橋本 進吉
源氏物語研究の初期	東京高師教授 山岸 八良
源氏物語の書誌	東京高師教授 山岸 八良
源氏物語の書誌	東京高師教授 植松 徳平

東京帝國大學國文學研究室編輯

軍記物語

定價金貳圓五拾錢
送料金六錢

軍記物の本質	朝鮮大學教授 高木 市之助
軍記物と擬古物語	東京帝國大學助教授 志田 義秀
主従關係とその思想	東京帝國大學助教授 志田 義秀
戰記物語の時代環境につきて	東京帝國大學助教授 志田 義秀
來迎文學の諸相	廣島高師教授 齋藤 清衛
軍記物にあらはれたる佛敎(?)	文學士 時下 米太郎
中世の英雄	靜岡高師教授 久澤 泰稔
鎧の威毛に就いて	東京女子大學教授 早川 甚三
西教徒の管見に入つた戰記文	東京女子大學教授 石村 貞吉
平家物語と時代精神	京都帝國大學教授 新村 出
小督と大原御幸(平語餘録)	浦和高等學校教授 沼澤 龍雄
平家物語の典據ありと思はるゝ文につきて	文學士 島津 久基
平家物語の源流と史義抄	東京帝國大學助教授 御橋 惠言
平家物語の註釋及研究	東京帝國大學助教授 橋本 進吉
愛戀、世間、出世間	東京帝國大學助教授 橋本 進吉
一考察	東京帝國大學助教授 橋本 進吉
保元平治物語の武人	武藏野高師教授 高木 武
保元平治物語の武人	東京高師教授 待島 清九郎
太平記概説	東京高師教授 待島 清九郎
太平記の語法について	東京高師教授 待島 清九郎
義經傳の淵源としての義經記	東京高師教授 待島 清九郎
曾我物語と義經記	東京高師教授 待島 清九郎
曾我物語につきて	東京高師教授 待島 清九郎

國史研究叢書第一編

東京帝國大學助教授 文學博士 平泉澄先生著

中世に於ける精神生活

定價金四圓五拾錢
送料金拾八錢

本書は從來殆ど閑却せられたる中世に於ける精神生活を主題とし、之を從横に解剖し、前人未踏の境地を開拓し、新たな組織を與へんと試みたものである。

一 先づ上代に於ける教育を検討して其本質を究め、之が中世に入つて如何に變遷したるかを、以て上代より受けたる精神的遺産を如何にすると共に、王朝の衰微によつて萌した上代憧憬の心境が如何に強烈に各方面に現れてゐるかを、

一 中世に於ける上代憧憬の念はやがて古典の研究を誘起した、よつて著者は其にその事情を明かにすると共に、古典の研究態度より引いて、強烈なる宗教意識の問題を誘導し、遂に上代の文學的價値は、中世に於いて全く宗教的價値に置き換へられるに至つた事情を明かにすると共に、此の宗教的意識は主として寺院の活動に依つて醸成せられた事情を明かにした。

一 中世に於ける教育の源泉たる寺院の活動を説き、其の時代相との關係を探討して寺院教育の本體を見ると共に、從來唯一の教育機關と考へられてゐた金澤文庫、足利學校を解剖して、其の謬見を打破し、兩者とも殆んど教育に關係のないことを明快に指摘した。

一 中世生活の一大主流をなす愛禮の本質を解剖して深刻なる時代形相を詳細に説述すると共に、之が上代末期の頹廢と、更に陰陽道、宿禰道並に佛教思想に因由する事情を闡明した。

一 更に中世に於て擡頭した新勢力たる武士的精神の特性を論じ、其の思想的根柢が禪宗によつて與へられたことを説き、やがて宋學が之に代つた所以を明かにした。

一 著者は國史學界に重きをなせる新進の大家、其の透徹した歴史觀と最も新しい研究方法とを具體化して錯雜極りなき中世精神生活の種々相を捉へ、よく其の關係を照破し、遺憾なく其の全面を展開してゐる。蓋し本書に依つて歴史家は其の研究の新生面を發見し、思想家は中世に於ける文化的價値を見出すであらう。

國史研究叢書第二編

東京帝國大學助教授 文學博士 平泉澄先生著

中世に於ける社寺と社會との關係

定價金四圓五拾錢
送料金拾四錢

我が國中世は從來専ら武家時代として取扱はれ、その社會生活に極めて密接なる關係を有し、而も極めて重要な地位を占有する社寺に於けるこの大缺陥を補はんと爲し、前人未踏の境地を開拓し、新たな組織を與へんと試みたものである。

一 アジール(寺入り)を中心として社會に於ける寺院の地位を論究した。先づ西歐諸國のアジールの歴史を述べ我が國上代に於ける見ないアジールが中世に入り漸く諸寺の間に發達し遂には重罪犯人と雖も一度寺門に入れば忽ち追跡を免れ、寺院は殆ど治外法權を有し公家武家と鼎立したる状態を説述した。

一 經濟生活を中心とし社寺と社會との關係を究明した。市町村の發達商業金融等の状態を述べ頼母子無盡爲替等の發達が社寺に負ふ所多きを説き關所御師等に就て社寺と交通との關係に及び、更に西洋のギルドに比すべき座の問題を論述した。

一 精神生活の方面に於て教育を主とし社會との關係を明かにした。即ち幾多の新発見により中世の往來物約三十種をとつて之を從横に解剖し子弟は悉く寺院に學び教科書は多く僧侶の手に成つて社寺が教育の中心をなした事情を論じた。

一 かやうに犯し難き特權を有し社會生活の中心をなした社寺が中世に於ける原因を究めて世運の推移を明瞭にした。

一 著者の前著『中世に於ける精神生活』は一度波紋を描いた、少壯氣鋭なる著者は學界注目し思想界に立つて又本書をなす。著者が大學院に於ける研究の結果を要約し審査の結果學位を授けられ著者の中世史研究の第一歩として未だ曾て知られぬ幾多の重要な事實を編使して前人未踏の境地に參入し國史に一新生面を開いた。實に本書は少壯敢爲なる著者の地に生きたる史眼と正確着實な自由奔放なる態度を以て書かれしもの、これ從來の史書に絶えて見ざる所である。

國史研究叢書第三編

九州帝國大學助教授 竹岡勝也先生著

定價金參圓五拾錢
送料金拾四錢

近世史の發展と國學者の運動

近世に於ける國學者の地位並に運動に關し個々の問題は研究の對照とし、かなり重要視せられてゐるにも拘らず其が近世史の上に如何なる意義を有し如何なる影響を及ぼしてゐるかといふ問題は殆んど閑却せられてゐる。本書はこの大缺陥を補はんと爲し、國學者の運動を主題とし之を從横に論議し極めて内面本質に立入り全く新天地を開拓したものである。

一 先づ國學者の運動を個人の問題として觀ず、之を全體として取り扱ひ、其運動が如何に歴史の發展に與つてゐるかを觀じた。

一 殊に國學者の運動は國史に於けるルネッサンスとも云はるべき運動の最も典型的なるものとして、即ち中世に對する近世の特質を決定するものであり、同時に上代が如何なる形に於て近世に誕生してゐるかを明かにするものとして取扱つた。

一 かくて國學者の運動は當時の國民意識を喚び起しよく其精神生活に參照して始て永遠の歴史に關與する事を得た趣を明かにした。

一 本書は實にかくの如き新見地に立つて國學者の運動を取扱ひ、その運動を串貫して動いてゐる中心思潮を明かにしたもので寧ろ日本文化史更に日本精神史ともいふべきである。所謂宗教史又は文學史と稱するもの、範疇を脱して新に精神生活の内面に立入り一切の問題を一貫した一つの運動に歸し、此の運動を辿ることに依つて近世の歴史を展開せしめ遂に明治維新の由つて來る所を明かにしたものである。實に本書は歴史の最も新しい研究方法によつてなつたもので、歴史家はいふまでもなく一般國文學研究者にとつても必讀すべき好著である。

國史研究叢書第四編

東京帝國大學國史研究室 坂本太郎先生著

定價金貳圓五拾錢
送料金拾四錢

上代驛制の研究

交通の問題が一般社會の進歩、文化の發達に關與する所が多くあらゆる部門の歴史の理解に缺くべからざる基礎知識を供給するのである。我が上代史並に上代文化の考察に於ても交通上の研究が極めて重要な地位を占めてゐることはいふまでもない。然るにこの種の研究は從來殆ど閑却せられてゐた憾がある。著者は日本交通史の研究に従事すること多年、この間に於ける缺陥を補はんと爲しその研究を以て問はんとするのである。

一 驛制の意義と起原とを廣く諸外國の例に就て論じ併せて我が國に於けるその創設に就て考察した。

一 上代に於ける驛を設備と運用とに分ち、更にこれ等を制度と實際との二方面より検討した。制度の研究では驛家の組織を論じて驛務に携はる人民の苦惱を察し、驛の位置を考へては郷と驛との關係に新見解を施し、水驛の性質を推究しては通説の誤謬を指摘し、實際の方面に於ては行幸啓の跡を察して交通上の意義を論じ、驛使・傳使・給食馬使の三種の官使に就て透徹せる解釋を施し、その他貢物の運搬、役夫の往來、庶人の旅 状態などを考察し、就中驛傳の區別に關する見解は古來の疑問に前人未踏の斷案を下し貢物の運搬と驛家との關係などに通説の缺陥を正さんとした。

一 最後の驛制が上代末期に如何に衰へ崩れたるかを觀察し、官營官著者は最近東大國史學科が生んだ秀才である。現時の混淆枯渴せる國史學界に清新の氣を吐くもの、近代の理智に加ふるに自由奔放にしてしかも正確着實なる史眼を以て、國史學上の一大空虛を捉へ縱横に考察論評して餘蘊なからしめた。史學專門家はもとより敢へて一般讀書子の清鑒を俟つ。

東京帝國大學國史研究室 原田亨一先生著

國史研究叢書第五編

近世日本演劇の源流

定價金參圓貳拾錢 送料金拾四錢

近世日本演劇の源流を代表する歌舞伎劇は、最初から民間の結んだ一大收穫である。この歌舞伎劇は、最初から民間の結んだ一大收穫である。この歌舞伎劇は、最初から民間の結んだ一大收穫である。この歌舞伎劇は、最初から民間の結んだ一大收穫である。

東京帝國大學國史研究室 末松保和先生著

國史研究叢書第六編

近世に於ける北方問題の進展

定價金參圓 送料十四錢

近世日本の世界史への関與の一半は、實に北方問題である。北方問題は今後の日本に取つて重大な問題である。この北方問題は、今後の日本に取つて重大な問題である。この北方問題は、今後の日本に取つて重大な問題である。

文學士 小野均先生著

國史研究叢書第七編

近世城下町の研究

定價貳圓貳拾錢 送料拾四錢

本書は従來の専門史家によつても殆んど閉却せられてきた問題を捉へ、新史料を百方に探索して驚くべき創見を以て記述せられたものである。近世経済史の重要な一部門は本書によつて初めて開明せられた。

東京帝國大學文學研究室編輯

日本文學の母胎

價金貳圓 送料參錢

- 日本歌謡原始形に關する二三の考察 西村眞次
- 日本文學起源の概念 小山龍之輔
- 日本精神と古事記の成立 倉野憲司
- 創造神話の一考察 大西貞治
- 神代の信仰 故沼波瓊音
- 萬葉集に現はれた支那思想 林古溪
- 日本文學批評の發生 久松潜一
- 日本詩歌の母胎への一考察 高水市之助
- 幽玄美思潮の深化 齋藤清衛
- 俳句の形式原理に就て 山口麻太郎
- 雑俳史(一) 顯原退藏
- 路通の研究(一) 鈴木重雅
- 雪中庵風雪傳 酒井清一
- 桐高丈艸(二) 伊藤正雄
- 俳諧の虛實 俳諧の心法その三 各務虎雄
- 物集高見博士系圖年譜及著作目錄 寛五百里

東京帝國大學助教授 文學博士 平泉澄先生著

忽三版 我が歴史觀

定價金參圓四拾錢
送料金拾四錢

本書は著者の過去十年間に於ける國史の研究論文十三篇を収録したるもの、凡て是れ前人未鏡の新説で何れも學界を驚倒せしめたものである。
本書の巻頭卷局を飾る「我が歴史觀」並に「歴史に於ける實と眞」とは著者の史學に關する高邁なる見識を語るもので、歴史研究に一新旗幟を翻して史學の正しき歸趨を明かにしたるもので、著者の面目躍如たるものがある。更に其史實の研究に至つては透徹せる歴史觀と犀利なる眼光とは紙背に徹せざれば止まなかつた。其の日光東照宮の史實を説いては寛永の大造營の事情を仔細に究明して舊説を悉く論破し前後十三年の長年月を費したりといふ通説を覆して僅々十七ヶ月にして成れるの真相を唱破したるが如き、徳川家康の遺金を研究しては希觀の史料を尾州家並に久能山に得て複雑極りなき史實を明快に組織だて經濟的方面より家康秀忠家光の性格の特質を鮮かに描出したるが如き、又史上に埋没せる五辻宮を研究しては守貞親王の御事蹟を隠れたる斷簡零墨の間に辿り建武中興前後に於ける小説よりも奇なる波瀾重疊の御生涯を傳して殆ど奇蹟的に成功したるが如き全く國史界獨歩の觀がある。そして此等三篇は著者が學位を得たる參考論文である。
其の他源頼朝が朝廷の年號を用ひざりし事情を闡明したるが如き、經濟史上最も複雑にして研究に困難なる「座」の問題を提げて諸家と論陣を張りたるが如き、又龜山上皇殉國の御祈願に關し國史界に議論沸騰したる際に嶄新なる心理的研究に依りよく其の真相を明かにしたるが如き、守護地頭に就て諸家の議論紛糾したる際に其等の學說の根本的誤謬を指摘して別に透徹せる新見解を出したるが如き、本書に收むる諸論文は何れも國史界の第一線に立つものである。全卷是れ金玉の文字苟も歴史に志す者の必讀の好著である。

東京帝國大學文學部講師 山中謙二先生著

新刊 西洋史概説

定價金四圓
送料金拾四錢

一體史學究極の目的は個々の史實を研究して其真相を究めるといふよりも、更に進んでその個々の史實が人類生活に如何なる意義を有し、それが如何に發展して現代生活を馴致したかを明かにする所に存する。本書は實に我が史學界に重きをなす著者が、この史學本來の立場に立つて西洋史を概観し一系の下に組織立てた新しい試みて、其の透徹せる歴史觀と豊富なる思想的素養と最も新しい研究法とによつてよく其真相を究めてゐる。
本書は西洋史の知識に正しい系統を與へ人類生活に意義あらしむることを主眼とした。即ち古代美術、文藝復興、産業革命、世界大戰、古代希臘の諸聖、シーザー、那翁、沙翁、マルクス 其他凡ての史實を捉へて史上に如何なる意義を有し如何なる役割を果し又將來に如何なる影響を及ぼすかを説いて之を嚴正に批判した。而して著者の犀利なる史眼は此等史實の裡に潜む思想生活の真相を捉へ其變遷推移の狀を大觀し人類生活發展の真相を描出した。
一更に過去の史實によつて現代の由つて來つた趣を明確にした。即ち古代に就ては文化の變遷推移の跡を辿り、近世に就ては政治社會の方面に重きを置き、かくて現代文明發達の經路を明かにし、以て將來の向ふべき所に資せんとした。
誠に本書は人類經驗の總記録であり、卓越せる文化史であつて特に現代生活に密接なる交渉を有する點に於て萬人必讀の良著である。實に本書によつて歴史家は其研究の新生面を發見し、一般讀書家は盡きざる興味を覺えながら現代世界の犬勢を知ると共に現代社會生活に對する正しい理解を理解を得ることが出来る。

378
265

終

